

城山遺跡 第76地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『城山遺跡第76地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成24年度に受託事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

城山遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

遺跡内には、市指定文化財の「城山貝塚」、大石信濃守の居城跡と考えられる「柏の城」をはじめ、市内最古の土器群に位置付けられる「爪形文系土器」が発見されるなど、注目を浴びています。

さて、今回報告する第76地点の調査内容ですが、縄文時代の炉穴3基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡2軒、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代以降の土坑6基、掘立柱建築遺構2棟、そして柱穴が多数見つかりました。遺物は縄文時代の土器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土師器、平安時代の須恵器、中世以降の妬器、青磁、銭貨などが出土しました。特に、銭貨が土坑の中から計8枚出土しており、銭貨が出土した土坑はお墓であった可能性が指摘されます。

このような貴重な成果が得られ、志木市の歴史にまた新たな1ページを追加することができました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたっては、志木市立志木第三小学校の敷地内であり、林 八洲夫校長先生をはじめ、多くの先生方にご理解とご協力を賜りました。また、生徒を対象とした現地説明会の開催についても、快く受け入れてくださいました。心から御礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、平成24年度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する城山遺跡第76地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、災害用トイレ設置に伴う記録保存のための発掘調査として、工事主体者である志木市から委託を受け、志木市教育委員会が調査主体者として実施した。
3. 発掘調査は平成24年4月26日から5月24日まで行い、整理作業・報告書作成は平成24年8月6日から平成25年3月31日まで埋蔵文化財発掘調査支援協同組合柏事務所で行った。
4. 本書は尾形則敏・大久保聡が監修し、編集は埋蔵文化財発掘調査支援協同組合 白崎智隆が行った。執筆は第1章を尾形則敏、第2章を大久保聡、それ以外を白崎智隆が担当した。
5. 表土剥ぎ作業及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
6. 自然化学分析については、貝類種同定を國學院大學研究開発推進機構 阿部常樹氏に、炭化種実・炭化材樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
8. 調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	白砂正明（平成20年4月～平成24年6月）
〃	尾崎健市（平成24年7月～）
教 育 政 策 部 長	丸山秀幸（平成24年4月～平成24年9月）
教 育 政 策 部 次 長	菊原龍治（平成24年10月～）
生 涯 学 習 課 長	谷口 敬（平成24年4月～）
生 涯 学 習 課 副 課 長	松井俊之（平成23年1月～）
生 涯 学 習 課 主 査	尾形則敏（平成21年4月～）
生 涯 学 習 課 専 任 主 査	武井香代子（平成24年4月～）
生 涯 学 習 課 主 任	松永真知子（平成22年4月～）
生 涯 学 習 課 主 事	徳留彰紀（平成22年4月～）
生 涯 学 習 課 主 事 補	大久保聡（平成24年4月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長） 高橋長次・高橋 豊・上野守嘉・深瀬 克（委員）

【埋蔵文化財発掘調査支援協同組合】

代 表 理 事	杉山 博
副 理 事 長	崎川 修
専 務 理 事	保坂邦之
調 査 研 究 員	白崎智隆

9. 発掘作業及び整理作業参加者

○発掘作業

調査担当者	尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡
調査員	深井恵子
調査補助員	星野恵美子・鈴木浩子
発掘協力員	江口美智子・大橋康弘・林ゆき子・松浦恵子・村田浩美
重機オペレータ	田中三二（株式会社大塚屋商店）

○整理作業

主任担当者	白崎智隆（埋蔵文化財発掘調査支援協同組合）
整理協力員	秋元智子・鈴木由香里・田中美代子

10. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第三小学校

石井龍太・井上哲朗・江原 順・小川勝和・小野正敏・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・齊藤 純・齋藤欣延・斯波 治・渋谷寛子・須賀博子・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・永井智教・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・前田秀則・松本富雄・峰村 篤・柳井章宏・山田尚友・山本 龍・額塚正浩・和田晋治・渡辺邦仁

11. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については下記のとおりである。

- 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）／平成24年5月24日付け 教生文第5－97号
- 埋蔵物の文化財認定について／平成24年11月14日付け 教生文第7－143号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y＝弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡 H＝古墳時代前期・後期の住居跡

T＝掘立柱建築遺構 D＝土坑 F P＝炉穴 P＝ビット

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 調査の方法と経過	10
第3章 検出された遺構と遺物	15
第1節 縄文時代	15
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期	16
第3節 古墳時代後期	22
第4節 奈良・平安時代	29
第5節 中世以降	31
第6節 遺構外出土遺物	40
第4章 調査のまとめ	44
第1節 縄文時代	44
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期	45
第3節 古墳時代後期	46
第4節 平安時代	46
第5節 中世以降	47
付編 自然化学分析	
Ⅰ. 城山遺跡第76地点出土の貝類遺体群	51
Ⅱ. 城山遺跡第76地点から出土した炭化種実	52
Ⅲ. 城山遺跡第76地点出土炭化材の樹種同定	54

図 版

報告書抄録

— 挿 図 目 次 —

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図	城山遺跡の調査地点 (1/3,000)	9
第3図	確認調査時の遺跡分布 (1/150)	13
第4図	遺構分布図 (1/100)	14
第5図	956号土坑 (1/60)	15
第6図	11～13号炉穴 (1/30)	16
第7図	7号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	17
第8図	286号住居跡 (1/60)	18
第9図	286号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	19
第10図	69号ピット・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	20
第11図	287号住居跡 (1/60)	23
第12図	287号住居跡遺物出土状態 (1/60)	23
第13図	287号住居跡出土遺物 (1/4・1/2)	24
第14図	288号住居跡 (1/60)	25
第15図	288号住居跡カマド・出土遺物 (1/30・1/4)	25
第16図	7号掘立柱建築遺構・出土遺物 (1/60・1/4)	29
第17図	41号ピット (1/60)	30
第18図	8号掘立柱建築遺構 (1/60)	31
第19図	950～955号土坑 (1/60)	33
第20図	950号土坑出土遺物 (1/3)	35
第21図	953号土坑出土遺物 (1/4・1/1)	36
第22図	1号ピット出土遺物 (1/4)	37
第23図	26・33号ピット (1/60)	37
第24図	遺構外出土遺物 (1/1・1/3・1/4)	41
第25図	二枚貝類計測凡例	51

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	城山遺跡第76地点の発掘調査工程表	12
第3表	7号住居跡出土遺物一覧	21
第4表	286号住居跡出土遺物一覧	21
第5表	69号ピット出土遺物一覧	21
第6表	287号住居跡出土遺物一覧	28
第7表	288号住居跡出土遺物一覧	28
第8表	7号掘立柱建築遺構出土遺物一覧	30
第9表	遺構出土の陶磁器一覧	38
第10表	953号土坑出土銭貨一覧	38
第11表	B群土坑一覧	38
第12表	C群土坑一覧	38
第13表	中世以降ピット一覧	39
第14表	遺構外出土の縄文時代の石器一覧	42
第15表	遺構外出土の縄文土器一覧	43
第16表	遺構外出土の古墳時代の土器一覧	43
第17表	縄文土器型式別出土量	44
第18表	城山遺跡第76地点から出土した炭化種実	52
第19表	城山遺跡第76地点出土炭化材の樹種同定結果	54
第20表	城山遺跡第76地点出土炭化材の樹種同定結果一覧	56

図 版 目 次

- 図版1 1. 表土剥ぎ風景(1区) 2. 表土剥ぎ風景(2区) 3. 作業風景(1区)
4. 作業風景(2区) 5. 第三小学校生徒現場見学風景 6. 956号土坑
7. 11～13号炉穴 8. 11号炉穴
- 図版2 1. 12号炉穴 2. 13号炉穴 3. 7号住居跡 4. 286号住居跡
5. 286号住居跡炭化材・焼土出土状態 6. 69号ピット遺物出土状態 7. 69号ピット
8. 287号住居跡遺物出土状態
- 図版3 1. 287号住居跡遺物出土状態 2. 287号住居跡遺物出土状態
3. 287号住居跡紡錘車出土状態 4. 287号住居跡凸堤 5. 287号住居跡
6. 288号住居跡 7. 288号住居跡カマド 8. 7号掘立柱建築遺構
- 図版4 1. 7号掘立柱建築遺構(14P)土層断面 2. 8号掘立柱建築遺構
3. 8号掘立柱建築遺構(16P)土層断面 4. 8号掘立柱建築遺構(16P)
5. 8号掘立柱建築遺構(37P)土層断面 6. 950号土坑
7. 951号土坑 8. 952号土坑
- 図版5 1. 953号土坑土層断面 2. 953号土坑 3. 954号土坑
4. 955号土坑炭化材・焼土検出状態 5. 955号土坑 6. 30号ピット貝出土状態
7. 調査区全景(1区) 8. 調査区全景(2区)
- 図版6 1. 7号住居跡出土遺物 2. 286号住居跡出土遺物 3. 69号ピット出土遺物
- 図版7 1. 287号住居跡出土遺物 2. 288号住居跡出土遺物 3. 7号掘立柱建築遺構出土遺物
4. 950号土坑出土遺物 5. 951号土坑出土遺物 6. 1号ピット出土遺物
- 図版8 1. 953号土坑出土遺物 2. 遺構外出土遺物(縄文時代)
- 図版9 1. 遺構外出土遺物(古墳時代以降) 2. 出土した貝類(30P)
3. 城山遺跡第76地点から出土した炭化種実
- 図版10 城山遺跡第76地点出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万1千人の自然と文化の調和する都市である。

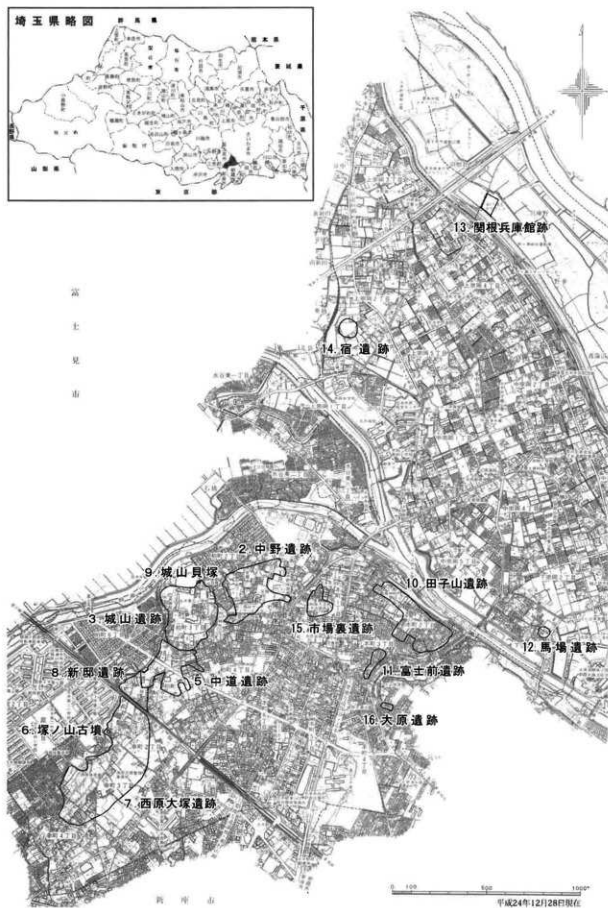
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新郷遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280m ²	畑・宅地	城跡跡・集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、溝造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鉄造関連遺物等
5	中道	50,500m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新郷	20,080m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（早～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローマ探掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁瓦礫遺構	木・石製品
15	市場裏	13,800m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
	合計	481,860m ²					

平成24年12月28日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覽



第1図 市城の地形と遺跡分布 (1/20,000)

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現コリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7(1995)年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

平成20・21(2009・2010)年度にかけては、城山遺跡第62地点の発掘調査が実施され、1ヶ所の石器ブロックが検出されている。

平成22(2010)年3月～5月にかけて発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5ヶ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層の第Ⅵ層を中心とする3ヶ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で縹系文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、縹系文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で黒浜式期、城山遺跡では諸磯式期の住居跡が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が

強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が550軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に7世紀前半から中葉にかけては、縄文中期を超えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、7世紀前半以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を超え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

また、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点の調査を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。最新では、平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査により、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点から、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡として100基を超える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸刺が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内製品と鳩山製品の須恵器が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雜記』(註2)に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十五坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8(1996)年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。また平成13(2001)年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。戦国期の資料としては、平成6(1994)年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鋳の札である鉄製品1点と鉄鏃1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2～5年)に関連するローム探掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、探掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2km、柳瀬川駅の東約0.8kmに位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、最近では、平成18・19（2006・2007）年の福祉施設建設に伴う第58・60地点、平成19～21年度（2008・2009）年には、分譲住宅建設に伴う第62地点、平成21～22年度には、共同住宅建設に伴う第63地点、さらに平成23年度には、共同住宅建設に伴う第72地点や分譲住宅建設に伴う第71地点と毎年のように小・中規模に相当する開発行為に伴う発掘調査が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況となっている。

さて、城山遺跡は、これまでに78回の調査（平成24年12月28日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

以上、城山遺跡における今までの調査成果をまとめると、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であり、また、複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密な地区であることが判明してきている。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

- 旧石器時代 石器ブロックは第42地点から2ヶ所、第62地点から1ヶ所が検出されている。第71地点から礫群2ブロックが検出される。
- 縄文時代 第16・22地点から草創期の爪形文系土器1点ずつ出土。第21地点から草創期の多縄文系土器3点が出土。市指定文化財「城山貝塚」。平成3（1991）年3月29日指定。前期の斜面貝塚。前期の諸磯式期の住居跡が昭和49（1974）年の市史編さん事業における調査において1軒、第59地点から1軒が検出されている。また、第46地点から詳細時期は決定できなかったが、前期末葉の住居跡1軒が検出されている。第4地点から中期の住居跡1軒。加曽利EⅡ式期。
- 弥生時代 後期の住居跡4軒。第71地点から住居跡2軒が検出されている。
- 古墳時代 前期の住居跡2軒。中期から後期の大集落。5世紀中葉から7世紀後葉にかけての住居跡が現在、約200軒を超えて検出されている。
- 奈良時代 検出される住居跡は大部分が平安時代に比定されるものであり、今のところ検出されていない。第42地点の1号ピットから偏行唐草文の軒平瓦片1点出土。
- 平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡約30軒。第35地点128号住居跡から、印面に「冨」と書かれた銅印が出土。

第62地点241号住居跡から、富壽神寶2枚とその周辺から鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、当地における古代銭貨の受容を示す一例につながった。

○中・近世 「柏の城」関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑が多数検出されている。第71地点では、南北に延びる「二の丸」曲輪に関連する中規模の堀跡が検出されている。

第58・60地点から方形区画の溝を伴う遺構が検出され、40号溝跡からは中国・同安窯系の青磁碗1点（13世紀前半）が出土している。

第29地点の127号土坑は馬の埋葬土坑。

第35地点からは鑄造関連遺構が検出されている。130号土坑は鑄造土坑。134号土坑は溶解炉と考えられる。第71地点でも第35地点の鑄造関連遺構に関係する遺物が多数出土している。

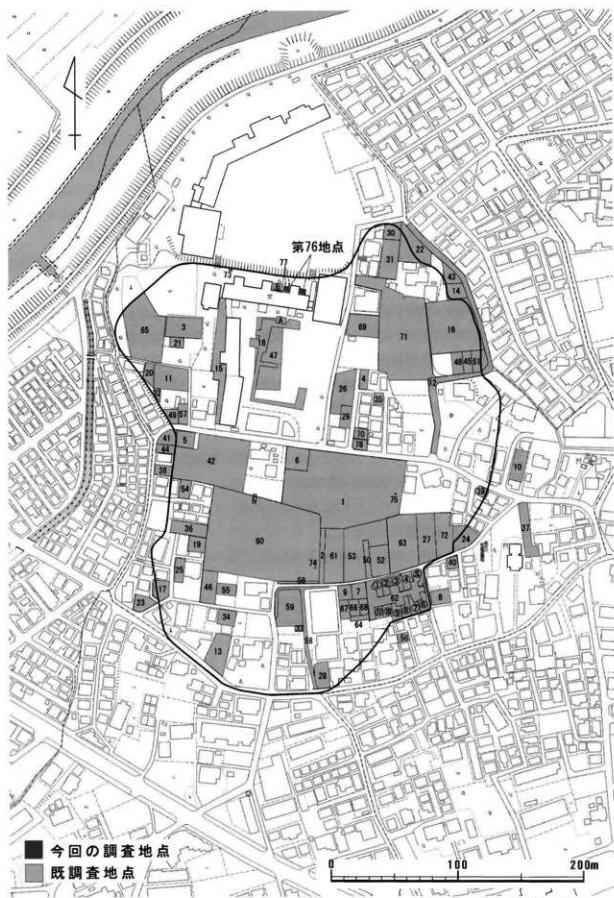
〔註〕

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主 なぬき かつらぎ ぎやうもん けんがく 宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18（1486）年6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

〔引用文献〕

神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの誤説を糾す」『郷土志木』第31号



第2図 城山遺跡の調査地点 (1 / 3,000)

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成23年12月、土木工事主体者である志木市より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。工事計画は志木市柏町三丁目2609・2610の一部（55.0㎡）である志木市立第三小学校内に災害用トイレの設置を行うものである。

教育委員会は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-09-003）に該当するため、概ね下記のとおりに回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 確認調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能である場合については、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

同月27日、教育委員会は、確認調査依頼書を受理し、1月27日に確認調査を実施した。調査対象区は2箇所に分かれており、東側を1区、西側を2区と呼称した。1・2区にそれぞれ2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、1区では、古墳時代の住居跡2軒、時期不詳の土坑1基、時期不詳のピット1本を確認した。2区では、古墳時代の住居跡3軒、時期不詳の溝跡1本、時期不詳の土坑2基、を確認した（第3図）。教育委員会は直ちに工事主体者に確認調査の結果を報告し、同時に埋蔵文化財の保存措置を要請した。

3月14日、保存措置に関する協議を行った結果、敷地全域において十分な保護層が確保できないため、記録保存（発掘調査）として取り扱うこととした。

以上により、教育委員会を調査主体に、平成24年4月26日より発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

（1）発掘調査

発掘調査期間は、平成24年4月26日から平成24年5月24日までとした。調査対象区は、2箇所に分かれており、東側を1区、西側を2区と呼称する。調査対象面積は、1区、2区ともに27.5㎡、計55.0㎡である。残土については、2区西側校舎裏の空いたスペースを残土置き場として確保し、対処することにした。

各区の調査経過を第2表にまとめ、以下に日付順に説明する。

- 4月26日 初めに1区の調査区を設定し、重機による表土剥ぎを開始した。本日中に1区の表土剥ぎを終え、続いて2区の調査区を設定した。
- 27日 2区の表土剥ぎを開始した。2区の表土剥ぎ終了後、安全確保のための防護柵を1区・2区にそれぞれ設置した。
- 5月1日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、1区内の整備と遺構確認作業を実施した。その結果、1区内では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡1軒（286H）、調査区北

東に中世以降の土坑1基(951 D)、調査区南東に縄文時代の土坑1基(956 D)、時期不明のピット数基を検出した。遺構検出後、遺構確認状況の写真を撮影し記録した。続いて2区の調査区内整備と遺構確認作業を実施した。2区では、調査区中央から北西隅にかけて弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒(7 Y)、古墳時代後期の住居跡1軒(288 H)、ピット23基を検出した。遺構確認状況の写真撮影と並行して1区の951 Dの精査、および攪乱除去作業を行った。

- 7日 1区：951 Dおよび攪乱掘削後、調査区全測図、攪乱範囲を平板測量によって記録した。測量作業と並行して、286 Hの精査を開始した。なお、調査区北西の攪乱を掘削した際に、286 Hの下に焼土の広がりが見られた。
- 8日 1区：286 Hの精査中に、住居中央付近から950 Dを検出したため、950 Dの検出写真を撮影し、精査を行った。土層断面の記録を行い、遺構を完掘した後、完掘状況の写真撮影および平面図で記録し、950 Dの調査を完了した。
- 9日 1区：286 H北側より長葎、坏が集中して出土したため、遺物出土状況の微細図を作成した。また、286 Hの土層断面を観察した際、断面上に別遺構の立ち上がり、周溝を確認した。そのため、286 H北西に重複した住居があると認識し、これを287 Hとした。
2区：ピットの精査を開始した。ピットの調査については、遺構を半載し、土層断面の観察・記録を行い、完掘後、完掘状況の写真撮影、平面図を作成し記録した。
- 10～11日 調査と並行して、志木第三小学校の生徒を対象に現地説明会を行った。
1区：286 Hに伴うピット、住居外のピットの精査を実施した。287 Hでは遺物出土状況の微細図、写真撮影を行った。
- 14日 1区：287 Hの完掘全景写真を撮影した。その後平板測量で遺構の記録を行った。
- 15日 1区：287 Hのエレベーション図の作成を行った。続いて貼床の精査を行ったが、その際に周溝に直交する間仕切り溝を2本検出した。
- 16日 1区：287 Hの間仕切り溝、床面精査後、286 Hの床面を検出した。この状況で286 Hの全景写真を撮影し、平板測量を行った。
2区：952 Dの精査を開始した。半載後、土層断面の観察を行い、写真撮影および断面図作成を行った。
- 17日 1区：286 Hのエレベーション図を作成した。951 Dでは、土層断面の写真撮影、断面図作成を行った。
2区：288 H、953 Dの精査を開始した。また、288 Hを精査中に住居内の西側から954 Dを検出したため、954 Dの精査を行った。953 Dでは覆土中から銭貨が出土した。
- 18日 1区：286 Hの貼床の精査を開始した。
2区：7 Yの精査を開始した。288 Hでは、精査中に住居内の北西角から955 Dを検出したため、955 Dの精査を行った。銭貨が出土した953 Dは墓坑と考えられたため、炭、土壌、焼土塊をそれぞれサンプリングした。
- 21日 1区：286 Hの貼床断面を写真で撮影し、断面図に追加させた。286 Hの調査完了後、11～13 F Pの検出状況の写真撮影を行い、被熱範囲の確認のため半載を行った。土層断面の観察、写真撮影を行い、断面図で記録した。956 Dの精査を開始した。半載後、

土層断面の観察、写真撮影を行い、断面図を作成した。完掘後、完掘状況の写真撮影、平面図作成を行った。1区の全景写真を撮影し、本日をもって1区の調査を終了した。

2区：955 Dの炭化材・焼土検出状況の写真撮影を行った。その後、炭化材をサンプリングし、完掘状況の写真撮影を行い、平面図を作成した。

22日 2区：7 Yを精査中、後世のピットを検出し、確認されたピットから半載を行った。288 Hでは、カマドの精査を実施した。攪乱が著しいため、断面は長軸半載のみの設定とした。

23日 1区：埋戻しを開始する。本日中に埋戻しを完了した。

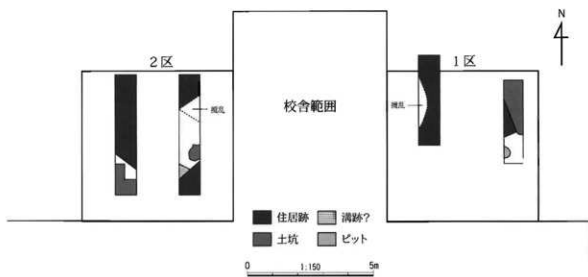
2区：7 Yの完掘後、断面図、平面図、エレベーション図を作成した。288 Hでは、カマド断面の写真撮影を行い、断面図を作成した。カマド完掘後、堀方の平面図を作成した。遺構の調査終了後、2区全景写真、及び7 Y、288 Hの完掘写真を撮影し、2区の調査を終了した。

調査終了後、器材の片づけ及び搬出作業を完了させた。

24日 2区：埋戻しを開始する。本日中に埋戻しを完了した。

		平成24年4月		5月				
		25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日
1区	表土剥ぎ作業	4.26						
	中世以降							
	950 D		5.1					
	平安時代							
	951 D			5.8				
	古墳時代後期							
	286 H			5.7				
	287 H			5.9				
	縄文時代							
	956 D							5.21
	11FP						5.18	
	12FP						5.18	
	13FP						5.18	
	埋戻し作業							5.23
2区	表土剥ぎ作業	4.27						
	中世以降							
	952 D					5.16		
	953 D					5.17		
	954 D					5.17		
	955 D					5.18		
	古墳時代後期							
	288 H					5.17		
	弥生時代							
	7 Y					5.18		
	現地説明会				5.10			
	器材片付け作業							5.23
	埋戻し作業							5.23

第2表 城山遺跡第76地点の発掘調査工程表

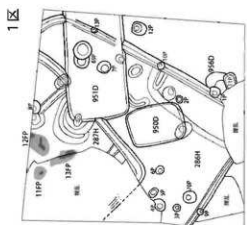


第3図 確認調査時の遺跡分布（1／150）

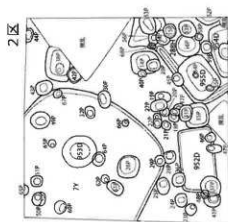
（2）整理作業・報告書作成作業

整理作業については、民間調査組織に委託することとし、指名競争入札を行った。その結果、業務を委託する民間調査組織が埋蔵文化財発掘調査支援協同組合（代表理事 杉山博）に決定し、志木市（志木市長 長沼明）との間で、委託契約を締結した。

以上より、8月6日から、遺物の洗浄・注記・接合作業遺構図面の修正など、報告書作成のための基礎整理作業を開始した。9月17日には基礎整理作業が完了し、遺物の実測・デジタルトレース・写真撮影、遺構図のデジタルトレースを開始した。11月19日には報告書作成のための資料が整い、遺構図・遺物図・写真図版の作成、原稿執筆、編集作業を行い、平成25年3月31日に報告書を刊行し、全ての調査が終了した。



校舎



B地点
(昭和57年調査)



第4図 遺構分布図(1/100)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、土坑1基(956 D)及び炉穴3基(11～13 F P)が検出された。

(2) 土坑

956号土坑

遺構 (第5図)

[位置] 1区。

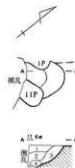
[検出状況] 286 H・1 P・11 P・攪乱に切られる。

[構造] 平面形：楕円形と推測される。断面形：壁面はなだらかに立ち上がる。規模：長軸不明／短軸不明／深さ44cm。長軸方位：不明。

[覆土] 5層に分層された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察結果から縄文時代と思われる。



- 1層 暗黄褐色土 ローム砂子・ローム小ブ
ロックを堆かに含む。
- 2層 暗黄褐色土 ローム砂子・ローム小ブ
ロックを堆かに含む。
- 3層 暗黄褐色土 ローム砂子・ローム小ブ
ロックを堆かに含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム砂子・ローム小ブ
ロック・ローム小ブ
ロックを多く含む。
- 5層 暗黄褐色土 ローム砂子・ローム小ブ
ロックを多く含む。

第5図 956号土坑(1/60)

(3) 炉穴

3基の炉穴は全て287 Hの貼床下から検出された。遺構上部は287 Hにより削平され、検出できたのは炉床のみである。このため、平面形や規模等の詳細は不明であり、計測できたのは炉床のデータのみである。時期についても遺物が全く出土していないため、その所属時期を特定することは困難であったが、本調査地点からは少量ではあるが条痕文系の土器が出土していることから、早期後葉と推定した。

11号炉穴

遺構 (第6図)

[位置] 1区。

[検出状況] 287 H・攪乱に切られる。

[構造] 平面形：不明。規模：不明。長軸方位：不明。炉床：長軸0.39 m／短軸不明／深さ5 cm。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代早期後葉。

12号炉穴

遺構 (第6図)

[位置] 1区。

[検出状況] 287 Hに切られる。北側は調査区域外のため、詳細は不明。

[構造] 平面形：不明。規模：不明。長軸方位：不明。炉床：長軸不明／短軸 0.47 m／深さ 5 cm。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代早期後葉。

13号炉穴

遺構 (第6図)

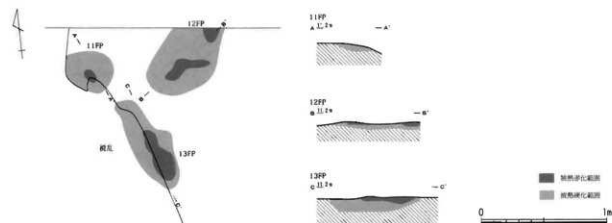
[位置] 1区。

[検出状況] 287 H・攪乱に切られる。

[構造] 平面形：不明。規模：不明。長軸方位：不明。炉床：長軸 0.81 m／短軸 不明／深さ 12 cm。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文時代早期後葉。



第6図 11～13号炉穴 (1/30)

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期

(1) 概要

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、住居跡2軒(7Y・286H)及びピット3本(28・44・69P)が検出された。

いずれの住居跡も出土遺物に乏しく詳細な時期比定は困難だが、7Yは弥生時代後期～古墳時代初頭、286Hは古墳時代前期に属すると考えられる。

(2) 住居跡

7号住居跡

遺構 (第7図)

[位置] 2区。

[検出状況] 953Dや多数のピットに切られる。北西側の大半が調査区域外のため、詳細は不明である。

〔構造〕平面形：隅丸長方形と推測される。規模：長軸 不明／短軸 不明／深さ 10.5～20cm。壁：傾斜して立ち上がる。主軸方位：不明。床面：確認できた範囲では床面の硬化は認められなかった。壁際は中央部より2～5cm程高い。

〔覆土〕黒褐色土を主体とした覆土。住居跡覆土は自然堆積によるものと考えられる。

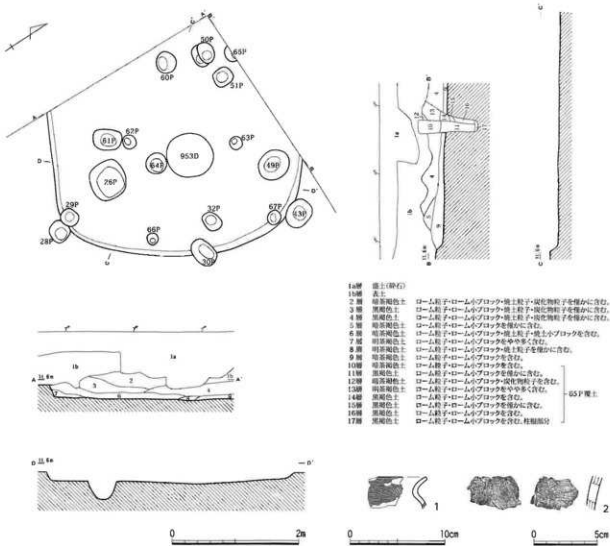
〔遺物〕鉢・甕形土器が出土した。小片が主体を占め、出土量も乏しい。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代初頭。

〔遺物〕(第7図、第3表)

〔土器〕(第7図1・2、第3表)

1は鉢形土器の口縁部破片、2は甕形土器の胴部破片である。



第7図 7号住居跡・出土遺物(1/60・1/4・1/3)

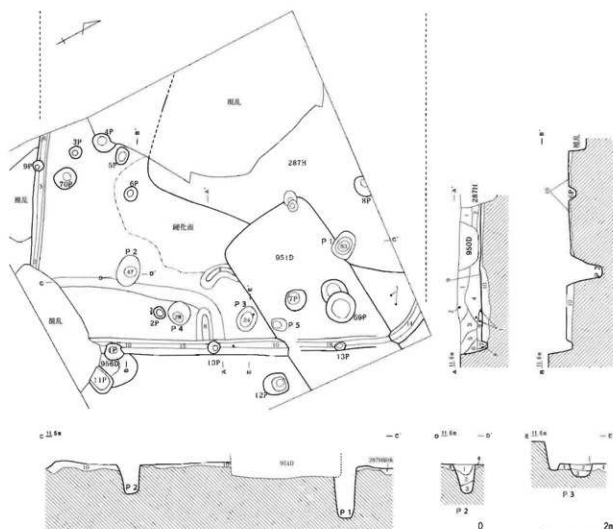
286号住居跡

遺構 (第8図)

[位置] 1区。

[検出状況] 287H、951Dに切られる。西壁及び北壁は調査区域外のため、詳細は不明である。

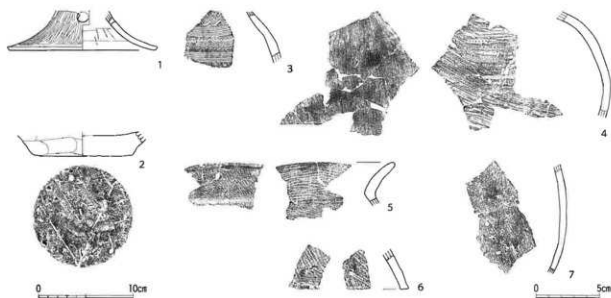
[構造] 平面形：方形。規模：長軸6.30m/短軸不明/深さ28~35cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲で全周する。上幅16~38cm/下幅6~10cm/深さ2~18cm。床面：住居中央付近が硬化していた。壁際は厚さ9~14cm、中央部は厚さ2~5cmの貼床により構築されていた。東壁南側付近は床面から8cm程高く、棚状になっていた。また、住居北東隅付近の



- A-A'
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。しまり中や中。壁より高い。
 - 2層 暗褐色土 ローム粒子を僅かに含む。しまり中や中。
 - 3層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。壁と粒子を僅かに含む。しまり中や中。
 - 4層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。ローム小ブロックを僅かに含む。しまり中。
 - 5層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。ローム小ブロック・粘土粒子を僅かに含む。しまり中や中。
 - 6層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 7層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。ローム小ブロックを多量に含む。粘土粒子を僅かに含む。しまり中。
 - 8層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 9層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 10層 硬灰。
 - P1 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。

- P2 (D-D')
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。しまり中。
 - 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。炭化物粒子を僅かに含む。しまり中。
 - 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 4層 硬灰。
- P3 (E-E')
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中 (固灰)。
 - 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多量に含む。しまり中。
 - 4層 硬灰。
- P4 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・粘土粒子を多量に含む。しまり中。人1/2以下。
- P5 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。炭化物粒子を僅かに含む。しまり中。

第8図 286号住居跡 (1/60)



第9図 286号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

床面直上で敷物状の炭化材（図版2-5参照）を検出した。カマド：調査区域外に存在すると思われる。入口施設の位置から推測すると住居跡西壁に構築されていた可能性が高い。柱穴：検出できた主柱穴はP1・P2の2本と思われる。深さはP1が83cm、P2が47cmである。入口施設：P3が入口梯子穴と思われる。深さは24cm。周囲を高さ4～8cmの凸堤が巡っていたと思われるが、北側は951Dによって切られているため詳細は不明である。

〔覆土〕10層に分層された。

〔遺物〕高環・甕・壺形土器、炭化材が出土したが、出土量は乏しい。炭化材の分析結果は、付編Ⅲを参照。

〔時期〕古墳時代前期。

〔遺物〕（第9図、第4表）

〔土器〕（第9図1～7、第4表）

1は高環形土器、3・4は壺形土器、2・5～7は甕形土器である。

（3）ピット

28号ピット

〔遺構〕（第4図）

〔位置〕2区。

〔検出状況〕29Pに切られる。

〔構造〕平面形：円形。規模：径0.32m/深さ47cm。

〔覆土〕ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕壺形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

〔時期〕古墳時代前期。

44号ピット

遺 構 (第4図)

[位 置] 2区。

[検出状況] 北側の一部が調査区域外。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.37 m / 短軸 不明 / 深さ 27cm。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 甕形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代前期。

69号ピット

遺 構 (第10図)

[位 置] 1区。

[検出状況] 951 Dに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.73 m / 短軸 0.48 m / 深さ 59cm。

[覆 土] 6層に分層された。

[遺 物] 甕形土器1点、壺形土器から転用された土製品2点が出土した。

[時 期] 古墳時代前期。

遺 物 (第10図、第5表)

[土 器] (第10図1、第5表)

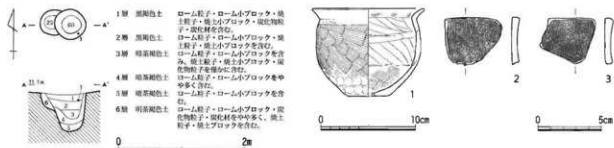
1は甕形土器である。

[土 製 品] (第10図2・3)

2・3は一個体の壺形土器から転用された用途不明の土製品と思われる。

2は最大長3.7cm・最大幅4.5cm・最大厚0.6cm・重さ11.5g。色調は明赤褐色を基調とする。粘土には砂粒のほか、土器片が僅かに含まれる。覆土中から出土した。

3は最大長3.6cm・最大幅4.4cm・最大厚0.6cm・重さ9.9g。色調は明赤褐色を基調とする。粘土には砂粒のほか、土器片が僅かに含まれる。覆土中から出土した。



第10図 69号ピット・出土遺物(1/60・1/4・1/3)

〔 〕は現存破及び推定破

神田番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第7図1	鉢	— (3.4)	小型の鉢か/口縁部内面及び外側全面に赤彩	胎土はにぶい黄褐色を基調	砂粒をやや多く、白色粒・土器片を僅かに含む	内面：口縁部はヘラ磨き、以下はヘラナデ/外面：ヘラ磨き	覆土中	口縁部～胴部の小破片
第7図2	甕	— (2.7)	胴部	胎土は灰黄褐色を基調	砂粒を少量、細礫を僅かに含む	内面：ハケ目調整後ヘラナデ/外面：ハケ目調整	覆土中	胴部小破片

(単位: cm)

第3表 7号住居跡出土遺物一覧

〔 〕は現存破及び推定破

神田番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第9図1	高坏	— (4.1) (15.8)	胴部/円孔あり	胎土はにぶい褐色を基調	砂粒を少量、白色粒・褐色粒・小石・土器片を僅かに含む	内面：ヘラナデ後裾部を横ナデ/外面：ヘラ磨き	住居東側のほぼ床面上	胴部 40%
第9図2	甕	— (2.6) (10.6)	底部/木葉痕が残る	胎土はにぶい黄褐色を基調	粗砂粒を少量、白色粒・土器片を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	入口施設の南側、覆土上期	底部のみ完存
第9図3	甕	— (4.4)	胴部上半/胴部のくびれが僅かに確認できる/精緻な胎土/東海系	明黄褐色を基調	砂粒・土器片を少量、白色粒・褐色粒を僅かに含む	内面：ナデ/外面：柳田文	覆土中	胴部小破片
第9図4	甕	— (9.0)	胴部上半	暗赤褐色を基調	砂粒・褐色粒を僅かに含む	内面：粗いヘラナデ/外面：ヘラ磨き	覆土中	胴部破片
第9図5	甕	— (3.5)	口縁部～胴部/口縁部は「く」の字状に屈曲する	黒褐色を基調	砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：ハケ目調整/外面：口縁部はハケ目調整後横ナデ	覆土中	口縁部破片
第9図6	台付甕	— (3.1)	胴部	にぶい褐色を基調	砂粒を少量含む	内面：ハケ目調整後横ナデ/外面：ハケ目調整後裾部下端を横ナデ	覆土中	胴部破片
第9図7	甕	— (8.7)	胴部	にぶい黄褐色を基調	砂粒を少量、土器片をやや多く含む	内面：ヘラナデ/外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き	覆土中	胴部破片

(単位: cm)

第4表 286号住居跡出土遺物一覧

〔 〕は現存破及び推定破

神田番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図1	甕	(11.8) 9.3 (4.4)	小型甕/口縁部は「く」の字状に屈曲する/最大径は口縁部と胴部中位が拮抗/平底	胎土は褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部上半はナデ、胴部下半はハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整、胴部下端は指頭痕が残る	東照近くの覆土上期	60%

(単位: cm)

第5表 69号ピット出土遺物一覧

第3節 古墳時代後期

(1) 概要

古墳時代後期の遺構は、住居跡2軒(287・288 H)及びピット8本(20・23・27・29・30・38・60・64 P)が検出された。288 Hは多数の後世の遺構に切られるため遺存状態が悪く、遺物もほとんど出土しなかった。これに対し、287 Hからは多くの遺物が出土している。これらの出土遺物から住居跡の時期は、287 Hが7世紀中葉、288 Hが6世紀中葉と推定される。

また、ピットについては、出土遺物の中で古墳時代後期と考えられる土器が最新であったピットに関して当該期のものとして扱った。しかし、いずれも出土量に乏しく時期比定が困難な小片が大半を占めるため、詳細は不明である。

(2) 住居跡

287号住居跡

遺 構 (第11・12図)

[位 置] 1区。

[検出状況] 951 Dに切られ、286 Hを切る。北東壁及び北西壁は調査区域外のため、詳細は不明である。

[構 造] 平面形：不明。規模：長軸不明/短軸不明/深さ25～32cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲で全周する。上幅22～27cm/下幅10～15cm/深さ18～24cm。南東壁から延びた間仕切りと思われる溝が2本確認された。このうち北側の溝は主柱穴のP1と連結する。上幅19～20cm/下幅10～11cm/深さ21～23cm。床面：確認できた範囲では住居跡全体で床面の硬化が認められた。貼床は2～10cmの厚さで施されていた。カマド：調査区域外に存在すると思われる。入口施設の位置から推測すると住居跡北西壁に構築されていた可能性が高い。柱穴：検出できた主柱穴はP1の1本と思われる。深さは68cm。入口施設：P2が入口梯子穴と思われる。深さは24cm。周囲を高さ2～5cmの凸堤が巡っていたと思われるが、ピット南側の住居壁際では凸堤が途切れている。

[覆 土] 13層に分層された。

[遺 物] 土師器杯・甕形土器・土製品が出土した。

[時 期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

遺 物 (第13図、第6表)

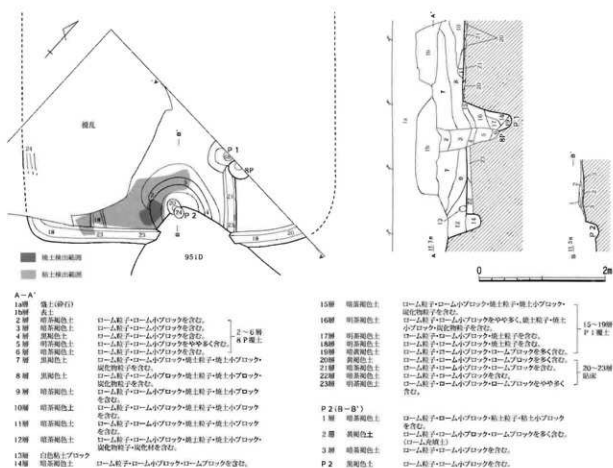
[土 器] (第13図1～6、第6表)

1～3は土師器杯形土器、4は須恵器杯形土器、5・6は土師器甕形土器である。

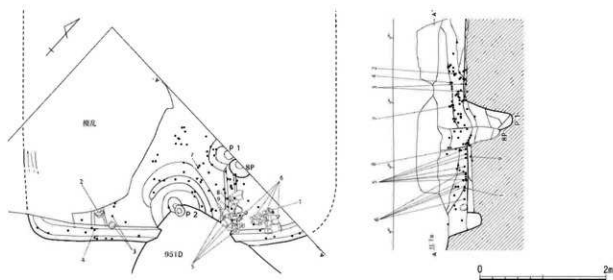
[土 製 品] (第13図7～9)

7は不明土製品である。残存長4.3cm・最大幅1.4cm・最大厚1.4cm・重さ9.2g。上端部を欠損する。色調は黒褐色を基調とする。粘土には砂粒が含まれる。P2北側の覆土中(床上25cm)からの出土である。

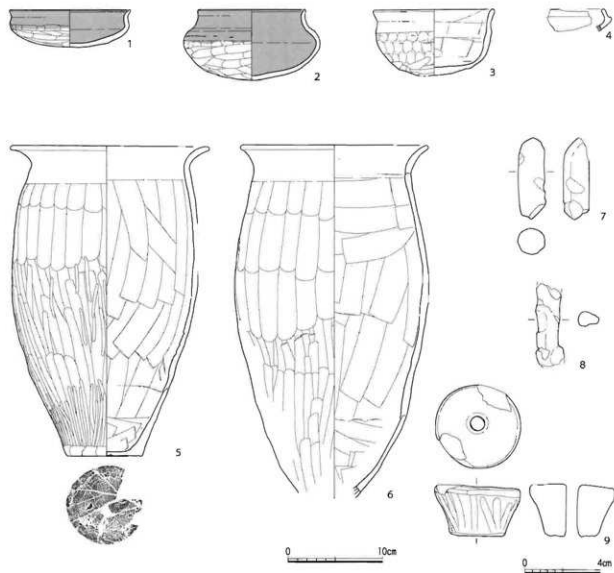
8は不明土製品である。形態は不整形で、残存長4.4cm・最大幅1.5cm・最大厚0.8cm・重さ4.1g。上下端を欠損する。色調は明黄褐色を基調とし、粘土には砂粒が僅かに含まれる。表面には指頭による成形痕が残り、指紋も観察できる。P2東側の覆土中(床上18cm)からの出土である。



第11図 287号住居跡(1/60)



第12図 287号住居跡遺物出土状態(1/60)



第13図 287号住居跡出土遺物（1/4・1/2）

9は土製紡錘車で、一部を欠損するがほぼ完形品である。直径4.5cm・最大厚2.8cm・孔径0.6cm・重さ50.6g。色調は黒褐色を基調とするが、欠損部で観察できる粘土は明黄褐色を呈することから黒彩されている可能性がある。粘土には砂粒と角閃石が含まれる。P2東側の間仕切り溝上（床面とほぼ同レベル）から出土した。

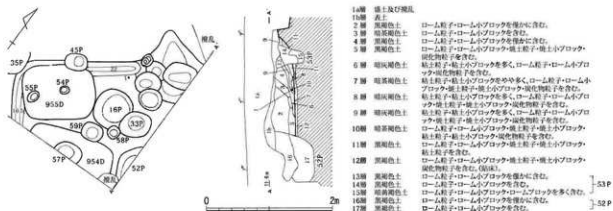
288号住居跡

遺構（第14・15図）

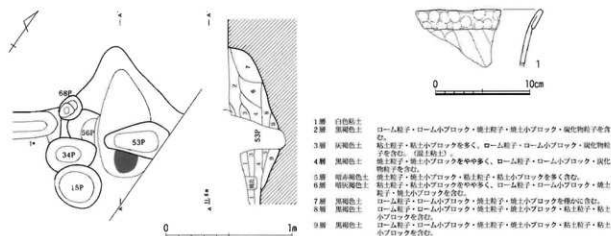
位置 2区。

検出状況 954 D・955 D及び多数のピットに切られる。カマド及び北西隅以外は調査区域外のため、詳細は不明である。

構造 平面形：不明。規模：長軸不明／短軸不明／深さ23～27cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。



第14図 288号住居跡(1/60)



第15図 288号住居跡カマド・出土遺物(1/30・1/4)

主軸方位：N-37°-W。壁溝：確認できた範囲でカマドを除き全周する。上幅20～22cm/下幅7～8cm/深さ16.5～22cm。床面：確認できた範囲では床面の硬化は認められなかった。貼床は4～5cmの厚さで施されていた。カマド：北西壁に位置する。多数の後世のピットに切られる。また、北東側は調査区域外のため詳細は不明である。主軸方位はN-37°-W。長さ116cm/幅不明/壁への掘り込み51cm。燃焼部は被熱により赤化していた。

[覆土] 11層に分層された。

[遺物] 土師器杯・甕・甔形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀中葉)。

[遺物] (第15図、第7表)

[土器] (第15図1、第7表)

1は土師器甔形土器である。

(3) ビット

20号ビット

遺 構 (第4図)

[位 置] 2区。

[検出状況] 27 Pに切られる。

[構 造] 平面形：円形。規模：径 0.25 m / 深さ 33cm。

[覆 土] ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 土師器環・甕形土器の小破片が各1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代後期。

23号ビット

遺 構 (第4図)

[位 置] 2区。

[構 造] 平面形：円形。規模：径 0.30 m / 深さ 46cm。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺 物] 土師器甕形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代後期。

27号ビット

遺 構 (第4図)

[位 置] 2区。

[検出状況] 20 Pを切る。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸 0.45 m / 短軸 0.28 m / 深さ 47cm。

[覆 土] ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 土師器甕形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代後期。

29号ビット

遺 構 (第4図)

[位 置] 2区

[検出状況] 7 Y・28 Pを切る。

[構 造] 平面形：円形。規模：径 0.28 m / 深さ 44cm。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・炭化材・褐色粒子を含む暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 土師器甕形土器の小破片が2点出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代後期。

30号ピット

[遺構] (第4図)

[位置] 2区。

[検出状況] 7 Yを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.46 m / 短軸 0.32 m / 深さ 27cm。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 土師器甕形土器2点及び貝類が出土した。甕は小破片のため図示できなかった。貝類の同定結果は付編1を参照。

[時期] 古墳時代後期。

38号ピット

[遺構] (第4図)

[位置] 2区。

[検出状況] 7 T (42 P)・攪乱に切られる。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸 不明 / 短軸 0.65 m / 深さ 56cm。

[覆土] 上層にローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土が、下層にローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土が堆積する。

[遺物] 土師器甕形土器9点・土師器環形土器1点が出土したが、いずれも小破片で図示できるものはなかった。

[時期] 古墳時代後期。

60号ピット

[遺構] (第4図)

[位置] 2区。

[検出状況] 7 Yを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.35 m / 短軸 0.33 m / 深さ 48cm。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 土師器甕形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 古墳時代後期。

64号ピット

[遺構] (第4図)

[位置] 2区。

[検出状況] 7 Yを切り、953 Dに切られる。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.37 m / 短軸 0.33 m / 深さ 41cm。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 土師器甕形土器の小破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 古墳時代後期。

第3章 検出された遺構と遺物

() は現存量及び推定値

検出番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第13図1	土師器 環	4.0 (12.8) —	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境に稜を持つ/口縁部は内傾気味に外反する/口唇部内面には幅2mmの沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩/入土系土師器	胎土は明赤褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	入口施設の北側、南東壁付近の床面上	40%
第13図2	土師器 環	7.4 11.3 —	深身のもの/口縁部と底部の境は弱い稜を持つ/口縁部は直立気味に外反/口唇部内面には幅2mmの沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩/入土系土師器	胎土は明赤褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒(大)・小石を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り(口縁部直下には無調整部分が観察される)	入口施設の南側、南東壁付近の床面上	70%
第13図3	土師器 環	7.1 12.8 —	深身のもの/口縁部と底部の境は弱い稜を持つ/口縁部は直立気味に外反/口縁部は赤みが著しい/在地系土師器	浅黄褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒や白色粒、雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下は弱いナデ後底部付近をヘラ削り	入口施設の南側、南東壁際付近の床面上	口縁部を一部欠損
第13図4	須恵器 坏身	(2.4) — —	口縁部の立ち上がりは短く、内傾する/口唇部は丸い/底部はやや上方にのびるが磨滅により不明瞭/産地不明	灰色	砂粒をやや多く含む	内外面:ロクロ成形	入口施設の南側、南東壁際の覆土中	口縁部へ体部の小破片
第13図5	土師器 甕	33.1 21.0 8.3	長頸/口縁部は外反する/最大径は口縁部に持つ/平底で水菓箱が残る/在地系土師器	浅黄褐色を基調	砂粒・小石を多く、褐色粒(大)・雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後胴部上半を丁寧なナデ、胴部下位を中心に細長いナデ、さらに胴部下端を横位のヘラ削り	入口施設の北側、南東壁付近の床面上	口縁部へ底部の一部を欠損するがほぼ完形
第13図6	土師器 甕	(37.5) 19.8 —	長頸/口縁部は外反する/最大径は胴部中に持つ/在地系土師器	浅黄褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒(大)・雲母を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、胴部は縦位ヘラ削り後胴部上半をナデ(スリップか)	入口施設の北側、南東壁付近の床面上	80% 底部欠損

(単位:cm)

第6表 287号住居跡出土遺物一覧

() は現存量及び推定値

検出番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第15図1	土師器 甕	— (6.1) —	複合口縁	胎土は明赤褐色を基調	砂粒を多く、白色粒・褐色粒を僅かに含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/口縁部外面に指頭押痕による成形痕が残る	カマドの東側、壁溝付近の床面上	口縁部破片

(単位:cm)

第7表 288号住居跡出土遺物一覧

第4節 奈良・平安時代

(1) 概要

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建築遺構1棟(7T)、ピット1本(41P)が検出された。7Tについては、中世の954Dに切られること、57Pから9世紀代の須恵器環形土器が出土していることなどから、当該期の遺構と判断した。また、遺物の出土していないピットについては、中世以降に属するものとして次節で扱ったが、当該期のものが含まれる可能性も高い。

(2) 掘立柱建築遺構

7号掘立柱建築遺構

遺 構 (第16図)

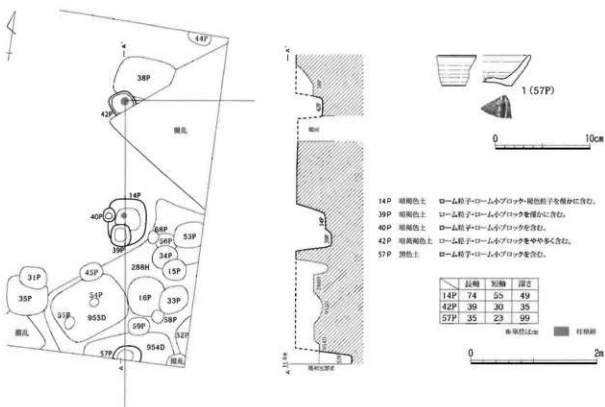
[位 置] 2区。

[検出状況] 57Pが954Dに切られる。

[構 造] 柱穴3本(北から42P・14P・57P)、2間分を確認した。主軸方位：N-8°-W。西側に柱穴が確認できなかったことから、調査区域外の東側及び南側に展開する南北棟と推定した。

[遺 物] 57Pから須恵器環形土器1点が出土した。

[時 期] 平安時代(9世紀前葉)。



第16図 7号掘立柱建築遺構・出土遺物(1/60・1/4)

遺物 (第16図、第8表)

[土器] (第16図1、第8表)

1は須恵器环形土器である。

(3) ピット

41号ピット

遺構 (第17図)

[位置] 2区。

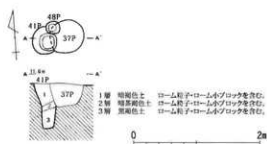
[検出状況] 37 Pに切られる。48 Pとの新旧関係は不明。

[構造] 平面形：円形。規模：径0.43 m / 深さ51 cm。

[覆土] 3層に分層された。

[遺物] 土師器甕形土器2点の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 平安時代。



第17図 41号ピット (1/60)

() は現存個及び測定個

神岡番号	器種	器高 口径 底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存率
第16図1	須恵器 環	— (3.2) —	底部から口縁部にかけて直線的 に開く / 還元炎焼成 / 東金子製 品	灰色を基 調 / 胎土 は暗赤褐 色	細砂粒・白 色粒を僅か に含む	ロクロ回転は右回転か / 底部に回 転糸切り痕が残る	57P 覆土	15%

[単位: cm]

第8表 7号掘立柱建築遺構出土遺物一覧

第5節 中世以降

(1) 概要

検出された遺構は、掘立柱建築遺構1棟(8T)、土坑6基(950D~955D)、ピット50本である。8Tについては時期比定の可能な遺物が出土しなかったため、952Dとの重複関係から当該期のものと推測した。土坑については、城山遺跡第42地点で報告された分類基準(尾形・深井・青木2005)を採用し、分類・報告を行った。

ピットについては、遺物が出土せず遺構の所属時期を判断することが困難なものについてもここで扱った。このため、時期の異なるものが含まれている可能性も否定できない。また、遺物が出土したものと及び調査時に断面図が作成されたものについては本文中で報告を行ったが、その他のピットについては第13表 中世以降ピット一覧を参照願いたい。

(2) 掘立柱建築遺構

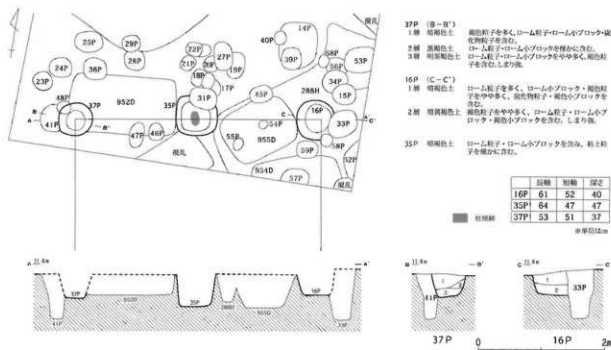
8号掘立柱建築遺構

遺 構 (第18図)

[位 置] 2区。

[検出状況] 16Pは288Hを切り、33・58Pに切られる。35Pは288Hを切り、31Pに切られる。37Pは952D及び41・48Pを切る。

[構 造] 柱穴3本(東から16P・35P・37P)、2間分を確認した。主軸方位: N-9°-W。北側に柱穴が確認できなかったことから、調査区域外の南側に展開する南北棟と推定した。



第18図 8号掘立柱建築遺構(1/60)

〔遺物〕 37 Pから炭化種子1点が出土した。炭化種子の同定結果は付編Ⅱを参照。

〔覆土〕 褐色粒子を多量に含む暗褐色土を基調とする。

〔時期〕 中世以降。

(3) 土坑

検出された土坑については、出土遺物が乏しいため時期・用途の詳細が不明なものも多いが、ここでは、平面形及び細部の形態的な特徴を城山遺跡第42地点で報告された分類基準に当てはめて説明を行う。

A群 方形の土坑

1類 断面が袋状の構造を呈するもの。(本調査地点では検出されず)

2類 単純構造を呈するもの。(本調査地点では検出されず)

B群 長方形の土坑

1類 溝状土坑であり、長軸の長さが3mを超えるまたは超えるであろうと想定されるもの。

1基 (951 D)。

2類 幅狭の長方形土坑であり、長軸の長さが3m未満で、短軸の長さが1m未満のもの。

3基 (952・954・955 D)。

3類 幅広の長方形土坑であり、長軸の長さが3m未満で、短軸の長さが1m以上のもの。

1基 (950 D)。

4類 火床部を有する土坑であり、1m前後の深い掘り込みをもつもの。

(本調査地点では検出されず)

C群 円形・楕円形の土坑 1基 (953 D)

D群 不整形の土坑 (本調査地点では検出されず)

E群 地下室・地下坑

1類 1 層坑1 主体部のもの。(本調査地点では検出されず)

2類 主体部が「八手」・「王」字状を呈する特殊なもの。(本調査地点では検出されず)

A群 方形の土坑

今回の調査では、1類・2類とも検出されなかった。

B群 長方形の土坑

本調査地点で検出した土坑6基のうち、5基が長方形を呈する土坑であった。B群2類に属する955 Dからは多くの焼土塊や炭化材が出土したが、その用途について詳細は不明である。

B群1類 溝状土坑

951号土坑

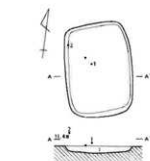
〔遺構〕 (第19図)

〔位置〕 1区。

〔検出状況〕 286 H・287 H・7 P・13 P・69 Pを切る。東側は調査区域外のため詳細は不明である。

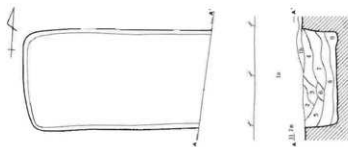
〔構造〕 平面形：長方形。規模：長軸 不明/短軸 1.55 m/深さ 56cm。長軸方位：N - 87° - E。

〔覆土〕 8層に分層された。



1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

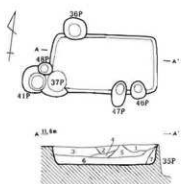
950号土坑 (B群3類)



1層 黄土(砂石)

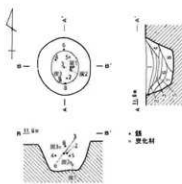
- 1層 黄土(砂石)
 2層 暗褐色土
 3層 暗褐色土
 4層 暗褐色土
 5層 暗褐色土
 6層 暗褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 暗褐色土
 9層 暗褐色土
- ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。

951号土坑 (B群1類)



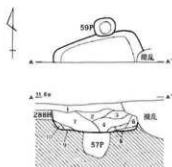
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化植物子を多く含む。
 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。炭化植物子を多く含む。
 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 5層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 6層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 7層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

952号土坑 (B群2類)



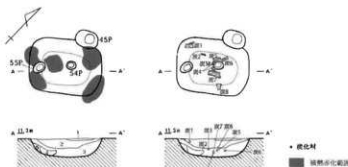
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子・炭化材・籾を含む。
 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 3層 暗褐色土 白色粒子(青粉)を多く含む。
 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 5層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化植物子を含む。
 6層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 7層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子・炭化材を含む。
 8層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

953号土坑 (C群)



- 1層 黄土
 2層 暗褐色土
 3層 暗褐色土
 4層 暗褐色土
 5層 暗褐色土
 6層 暗褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 暗褐色土
 9層 暗褐色土
 10層 暗褐色土
- ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・ロームブロックを多く含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・ロームブロックを多く含む。

954号土坑 (B群2類)



- 1層 暗褐色土
 2層 暗褐色土
 3層 暗褐色土
 4層 ロームブロック
 5層 暗褐色土
- ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロック・炭化植物子を含む。
 ローム粒子・ローム小ブロック・黄土粒子・黄土小ブロックを含む。

955号土坑 (B群2類)

0 2m

第19図 950～955号土坑 (1/60)

[遺物] 炆器1点が出土した。

[時期] 中世。

[遺物] (図版7-5、第9表)

[炆器] (図版7-5、第9表)

図版7-5は炆器で、常滑の甕である。

B群2類 幅狭の長方形土坑

952号土坑

[遺構] (第19図)

[位置] 2区。

[検出状況] 37 Pに切られる。その他、36・46～48 Pと重複するが新旧関係は不明。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.70 m／短軸0.93 m／深さ33cm。長軸方位：N-85°-E。

[覆土] 7層に分層された。

[遺物] 当該期の遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

954号土坑

[遺構] (第19図)

[位置] 2区。

[検出状況] 288 H・57 Pを切り、攪乱に切られる。他に59 Pと重複するが、新旧関係は不明。南側半分は調査区域外のため、詳細不明である。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.39 m／短軸不明／深さ45cm。長軸方位：N-75°-E。

[覆土] 9層に分層された。

[遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

955号土坑

[遺構] (第19図)

[位置] 2区。

[検出状況] 288 Hを切り、54・55 Pに切られる。他に45 Pと重複するが、新旧関係は不明。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.15 m／短軸0.88 m／深さ60cm。長軸方位：N-54°-E。

[覆土] 5層に分層された。

[遺物] 炭化材が8点出土した。燃料材と推測されるこれらは、全て樹種の同定を行った。分析結果は付編Ⅲを参照。その他、当該期の遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

B群3類 幅広い長方形土坑

950号土坑

遺構 (第19図)

[位置] 1区。

[検出状況] 286 Hを切る。286 Hの覆土中に構築される。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.50 m / 短軸 1.03 m / 深さ 12 cm。長軸方位：N - 12° - W。

[覆土] 1層に分層された。

[遺物] 柘器1点、土製品（土鍾）1が出土した。

[時期] 室町時代。

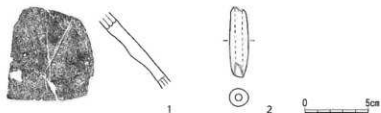
遺物 (第20図、第9表)

[柘器] (第20図1、第9表)

1は柘器で、常滑の甕である。

[土製品] (第20図2)

2は土製品で、管状の土鍾である。端部は一部欠損する。最大長 5.5 cm・最大径 1.5 cm・重さ 10.2 g。色調は橙色を基調とする。粘土には細砂粒のほか、褐色粒・小石が含まれる。北西隅の隙隙、土坑底面より 29 cm上から出土した。



第20図 950号土坑出土遺物 (1/3)

C群 円形・楕円形の土坑

953号土坑

遺構 (第19図)

[位置] 2区。

[検出状況] 7 Y・64 Pを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.91 m / 短軸 0.84 m / 深さ 47 cm。長軸方位：N - 2° - W。

[覆土] 8層に分層された。

[遺物] 土器1点、銭貨8点、炭化材3点、炭化種子8点が出土した。炭化材及び炭化種子の分析結果は付編Ⅱ・Ⅲを参照。

[時期] 中世。

[所見] 3層中に骨粉の可能性のある白色粒子を多く含むことや銭貨がまとまって出土したことなどから、墓坑の可能性はある。

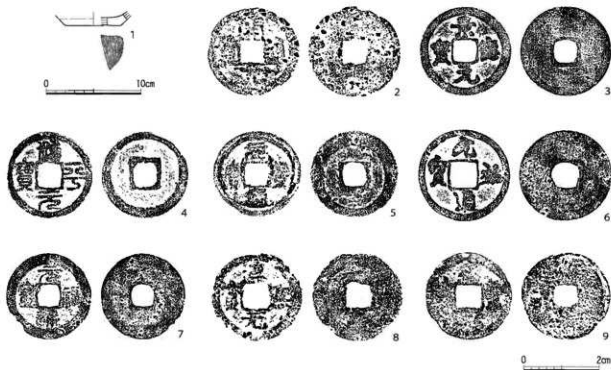
遺物 (第21図、第9表)

[土器] (第21図1、第9表)

1は土師質土器である。

[銭貨] (第21図2～9、第10表)

2は開通元寶、3は景德元寶、4は治平元寶、5は元豐通寶、6・7は元祐通寶、8は淳熙元寶である。9は磨滅により銭名が不明瞭だが、紹聖元寶か。



第21図 953号土坑出土遺物 (1/4・1/1)

D群 不整形の土坑

今回の調査では検出されなかった。

E群 地下室・地下坑

今回の調査では、1類・2類とも検出されなかった。

(4) ピット

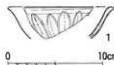
1号ピット

遺構 (第4図)

[位置] 1区。

[検出状況] 286 H・956 Dを切る。

- [構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.31 m / 短軸 0.27 m / 深さ 41cm。
 [覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。
 [遺物] 磁器小碗が1点出土した。
 [時期] 鎌倉時代（13世紀後葉～14世紀前葉）。
 [遺物] (第22図、第9表)
 [磁器] (第22図1、第9表)



1は龍泉窯系の青磁で、鎊蓮弁文を持つ小碗である。

第22図 1号ピット出土遺物(1/4)

26号ピット

- [遺構] (第23図)
 [位置] 2区。
 [検出状況] 7 Yを切る。
 [構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 0.58 m / 短軸 0.55 m / 深さ 55cm。
 [覆土] 8層に分層された。
 [遺物] 遺物は出土しなかった。
 [時期] 中世以降。

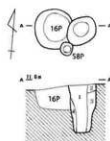
33号ピット

- [遺構] (第23図)
 [位置] 2区。
 [検出状況] 288 H・8 T (16 P)を切る。
 [構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.49 m / 短軸 0.40 m / 深さ 80cm。
 [覆土] 4層に分層された。
 [遺物] 当該期の遺物は出土しなかった。
 [時期] 中世以降。



26号ピット

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を僅かに、ローム小ブロック・炭化物粒子をごく僅かに含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、褐色粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含み、炭化物を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・炭化物を僅かに含む。
- 5層 暗褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子を含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物を僅かに含む。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。(同層)。



33号ピット

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。



第23図 26・33号ピット(1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

() は原存値及び推定値

検出番号	遺構名	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定産地	時 期
				器高	口径	底径			
第20図1	950 D	圜器	甕	—	—	—	胴部破片/色調は明赤褐色/胎土には砂粒・細礫を多量に含む/内外面ヘラナデ	常滑	中世
図版7-5	951 D	圜器	甕	—	—	—	胴部破片か/外面に自然釉/色調はふい赤褐色/胎土には砂粒・小石を多量に含む/内面ナデ	常滑	中世
第21図1	953 D	土器	土師質土器	(1.5)	—	(6.0)	底部破片/胎土には細砂粒を少量、小石を僅かに含む	在地系	中世
第22図1	1 P	磁器	小碗	(3.4)	(11.2)	—	口縁部破片/青磁/口縁端部は外反する/縦長い縦弁文/釉が厚く黒はやや不明瞭	龍泉窯系	13世紀後葉～14世紀前葉

(単位: cm)

第9表 遺構出土の陶磁器一覧

検出番号	銭貨名	外径	方孔一辺	重量	初鋳年	出土位置	遺存状態	備 考
第21図2	開通元寶	24.3	6.1	2.5	621	覆土中	完形	
第21図3	景德元寶	24.4	6.0	3.0	1004	覆土中	完形	真書
第21図4	治平元寶	23.4	6.0	2.8	1064	覆土中	完形	篆書
第21図5	元豊通寶	23.5	6.1	2.5	1078	覆土中	完形	篆書(銭名は不明瞭)
第21図6	元祐通寶	24.9	6.8	2.9	1086	覆土中	完形	真書
第21図7	元祐通寶	23.3	6.0	1.8	1086	覆土中	一部欠損	篆書
第21図8	淳熙元寶	24.0	6.9	2.2	1174	覆土中	完形	真書
第21図9	不明	23.9	5.9	2.6	—	覆土中	完形	紹聖元寶(真書)か

(単位: mm, g)

第10表 953号土坑出土銭貨一覧

遺構名	位置	分類	平面形	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出 土 遺 物					遺構年代	備 考	
								粘土	磁器	土器	土製品	鉄製品			その他
950D	1区	3類	長方形	1.50	1.03	0.12	N-12°-W	1			1			室明時代	第20図-1・2
951D	1区	1類	長方形	不明	1.55	0.56	N-87°-E	1						中世	図版7-5
952D	2区	2類	長方形	1.70	0.93	0.33	N-85°-E							中世以降	遺物なし
954D	2区	2類	長方形	1.39	不明	0.45	N-75°-E							中世以降	遺物なし
955D	2区	2類	長方形	1.15	0.88	0.60	N-54°-E					8		中世以降	炭化材/分析結果は付編3節参照
合 計								2	0	0	1	0	8		

(単位: m)

第11表 B群土坑一覧

遺構名	位置	分類	平面形	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出 土 遺 物					遺構年代	備 考	
								陶器	磁器	土器	土製品	鉄製品			その他
953D	2区	—	楕円形	0.91	0.84	0.47	N-2°-W			1			19	中世	第21図-1/その他: 銭貨8点は第21図-1・2-9・炭化材3点・炭化物種子8点/炭化材・炭化物種子の分析結果は付編2・3節を参照
合 計								0	0	1	0	0	19		

(単位: m)

第12表 C群土坑一覧

()は形存続・確定値

遺構名	位置	平面形	長軸長	短軸長	深さ	長軸 方位	出土遺物						遺構年代	備考
							陶器	磁器	土器	土製品	鉄製品	その他		
1P	1区	楕円形	0.31	0.27	0.41	—		1					14世紀前後	青磁蓮弁文碗A類が出土。
2P	1区	円形	0.20	0.16	0.41	—							中世以降	
3P	1区	円形	0.20	0.20	0.20	—							中世以降	
4P	1区	楕円形	0.37	0.28	0.23	—							中世以降	
5P	1区	楕円形	0.27	0.20	0.23	—							中世以降	
6P	1区	楕円形	0.23	0.20	0.13	—							中世以降	
7P	1区	円形	0.36	0.33	0.47	—							中世以降	
8P	1区	楕円形	(0.24)	(0.19)	0.44	—							中世以降	
9P	1区	円形	0.17	0.16	0.29	—							中世以降	
10P	1区	円形	0.19	0.19	0.18	—							中世以降	
11P	1区	隅丸長方形	(0.37)	0.32	0.30	—							中世以降	
12P	1区	隅丸長方形	0.39	0.34	0.76	—							中世以降	
13P	1区	楕円形	0.17	0.13	0.14	—							中世以降	
15P	2区	楕円形	0.39	0.34	0.80	—							中世以降	
17P	2区	楕円形	0.27	(0.17)	0.32	—							中世以降	
18P	2区	楕円形	0.36	0.28	0.36	—							中世以降	
19P	2区	楕円形	0.42	(0.19)	0.39	—							中世以降	
21P	2区	楕円形	0.25	0.20	0.14	—							中世以降	
22P	2区	楕円形	0.40	0.21	0.52	—							中世以降	
24P	2区	楕円形	0.36	0.30	0.40	—							中世以降	
25P	2区	楕円形	0.43	0.33	0.37	—							中世以降	
26P	2区	隅丸方形	0.58	0.55	0.55	—							中世以降	
31P	2区	隅丸長方形	0.44	0.33	0.43	—							中世以降	
32P	2区	楕円形	0.32	(0.25)	0.40	—							中世以降	
33P	2区	楕円形	0.49	0.40	0.80	—							中世以降	
34P	2区	楕円形	0.42	(0.26)	0.19	—							中世以降	
36P	2区	円形	0.35	0.35	0.44	—							中世以降	
43P	2区	隅丸長方形	0.45	0.37	0.54	—							中世以降	
45P	2区	楕円形	0.38	0.29	0.45	—							中世以降	
46P	2区	楕円形	0.28	0.23	0.41	—							中世以降	
47P	2区	楕円形	0.42	0.23	0.34	—							中世以降	
48P	2区	円形	0.21	0.20	0.42	—							中世以降	
49P	2区	楕円形	0.53	0.44	0.39	—							中世以降	
50P	2区	円形	0.35	0.35	0.66	—							中世以降	
51P	2区	隅丸方形	0.31	0.29	0.29	—							中世以降	
52P	2区	不明	(0.26)	(0.20)	0.30	—							中世以降	
53P	2区	楕円形	(0.44)	0.42	0.44	—							中世以降	
54P	2区	楕円形	0.17	0.13	0.07	—							中世以降	
55P	2区	楕円形	0.21	0.17	0.36	—							中世以降	
56P	2区	楕円形	(0.32)	(0.20)	0.30	—							中世以降	
58P	2区	円形	0.20	0.18	0.21	—							中世以降	
59P	2区	隅丸長方形	0.34	0.28	0.22	—							中世以降	
61P	2区	隅丸長方形	0.45	0.33	0.37	—							中世以降	
62P	2区	円形	0.22	0.20	0.15	—							中世以降	
63P	2区	円形	0.20	0.20	0.43	—							中世以降	
65P	2区	円形	0.28	(0.13)	0.51	—							中世以降	
66P	2区	円形	0.18	0.18	0.17	—							中世以降	
67P	2区	円形	0.22	0.21	0.16	—							中世以降	
68P	2区	楕円形	0.25	0.18	—	—							中世以降	
70P	1区	楕円形	0.35	0.32	0.17	—							中世以降	
合		計						1						

(単位: m)

第13表 中世以降ピット一覧

第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内ではあるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外から出土した遺物は、縄文時代の石器・縄文時代の土器・古墳時代後期の土器・古代以降の瓦に分類して報告する。

(1) 縄文時代の石器 (第24図1、第14表)

1は黒曜石製の石鎌である。

(2) 縄文時代の土器 (第24図2～25、第15表)

縄文時代の遺物包含層は確認できなかったが、弥生時代後期～中世以降の遺構覆土から169点・2,280.2gの縄文土器が出土した。分類により確認できた型式は早期条痕文系、前期二ツ木式・関山式・黒浜式・諸磯式・浮島式、中期阿玉台式・勝坂式・加曾利E式、後期称名寺式・堀之内式・加曾利B式、晩期安行式と広範な時期に及ぶ。ただし、出土した土器は小破片が主体であるため、型式分類が困難だったものも少なくない。

2～4は早期の条痕文系土器である。胎土には繊維を含み、貝殻による条痕文が施文される。条痕文系土器は11点・193.2gが出土した。

5は前期の二ツ木式土器である。棒状工具による幅広の単沈線で文様が描かれ、その隙間にキザミを施し、瘤状の貼付文が付される。二ツ木式土器は1点・52.8gが出土した。

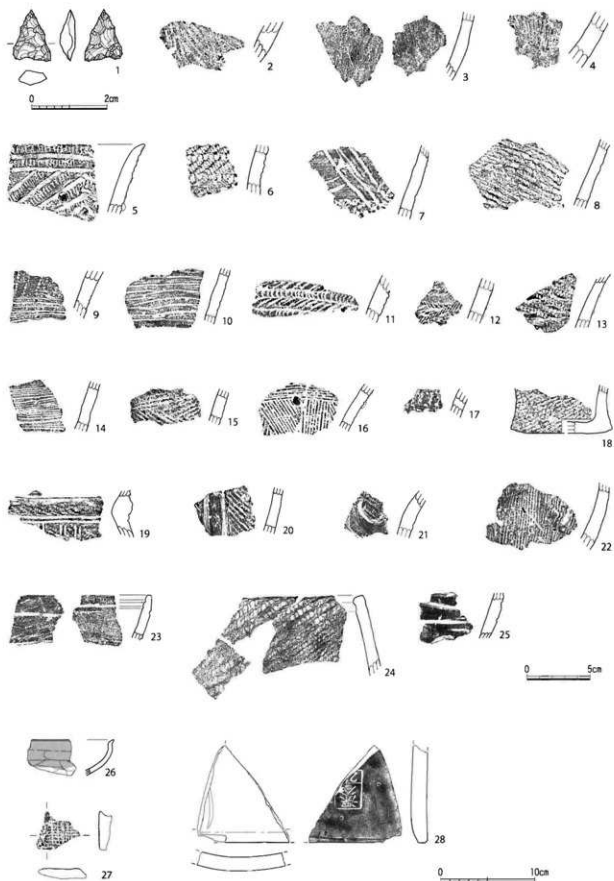
6は前期の関山式土器である。末端環付の単節縄文LRが多段に横位施文される。関山式土器は7点・86.1gが出土したが何れも小破片である。

7・8は前期の黒浜式土器である。7は半載竹管による平行沈線で文様が描かれる。主文様の下段には末端環付の単節縄文LRが横位に施文される。黒浜式土器は18点・233.2gが出土した。

9～16は前期の諸磯式土器である。9・10は諸磯a式であり、半載竹管による幅の狭い平行沈線により文様が描かれる。9は文様下に地文として単節縄文LRが施される。10は地文が施されていないことから、浮島I式との分類が困難だが、地域性を考慮し諸磯式と判断した。11～15は諸磯b式である。11は半載竹管内皮による爪形文を施し、その隙間に斜位のキザミを加える。諸磯b式古段階に属すると考えられる。12・13は浮線文が施される土器である。12は浮線文上にキザミが、13は単節縄文RLが加えられる。13の地文は単節RL。12・13は諸磯b式の中段階に属する土器である。14・15は集合沈線が施される土器である。15は斜位の集合沈線を交互に施すことにより矢羽根状の文様が描かれる。14・15は諸磯b式の新段階に属すると考えられる。16は諸磯c式である。集合沈線により文様が描かれ、その上にボタン状貼付文が付される。諸磯式土器は56点・753.0gが出土した。

17は前期の浮島式土器である。アナダラ属の貝殻腹縁を用いたロッキング手法により貝殻文及び半載竹管による変形爪形文が施される。浮島Ib～II式に属すると考えられる。浮島式土器は1点・6.6gが出土した。

18は前期後葉～末に属すると考えられる土器の底部破片である。単節縄文LRが横位に施される。



第24図 遺構外出土遺物 (1/1・1/3・1/4)

19は中期の阿玉台式土器である。頸部に隆帯が巡り、その上下に半截竹管による平行沈線が沿うように施される。地文は単節縄文RL。阿玉台IV式と考えられるが、胴部を垂下する沈線から中期中葉の所謂「中峠式」土器に属する可能性も否定できない。阿玉台式土器は1点・45.8gが出土した。

20は中期の加曾利EⅢ式土器である。地文として単節縄文LRが縦位に施文され、磨消懸垂文が施される。加曾利E式土器は5点・97.4gが出土した。

21は後期の称名寺I式土器である。J字文と思われる文様が沈線により描かれ、単節縄文LRが充填施文される。称名寺式土器は1点・16.4gが出土した。

22は称名寺式～堀之内式に属すると考えられる土器である。櫛歯状工具による条線文が施される。

23は後期の堀之内2式土器である。沈線により文様が描かれ、地文は施されない。口唇部内面に沈線が2条巡る。堀之内式土器は7点・142.3gが出土した。

24は後期加曾利B1式の粗製土器である。地文として単節縄文LRが施され、口唇部内面には幅広い浅い沈線が巡る。加曾利B式土器は1点・99.5gが出土した。

25は晩期の安行3d式に属する土器と考えられるが、小破片のため明確ではない。晩期安行式土器は1点・19.7gが出土した。

(3) 古墳時代後期の土器 (第24図26、第16表)

26は土師器坏形土器である。

(4) 古代以降の瓦 (第24図27・28)

27は布目が残る奈良・平安時代の瓦である。裏面は欠損し残っていない。残存長3.1cm・残存幅3.9cm・厚さ1.0cm・重さ11.7g。色調は橙色を呈する。粘土には砂粒のほか、褐色粒が僅かに含まれる。7Yから出土した。

28は近現代の平瓦ないし桧瓦である。裏面は前端部が面取りされ、「深谷2□」との刻印がある。残存長10.4cm・残存幅9.8cm・最大厚1.6cm・重さ149.1g。色調は黒褐色を呈する。粘土には砂粒のほか、灰白色のスコリアや角閃石・輝石が多く含まれる。1区の表土中から出土した。

種別番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第24図1	石敷	黒曜石	13.57	10.03	4.26	0.4	凹基部客塵/基部の扱りは浅い	286H

(単位: mm, g)

第14表 遺構外出土の縄文時代の石器一覧

種別番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考
					石	角	砂	他		
第24図2	胴	外面に貝殻条痕文	明赤褐 5YR5/6	条痕文系			○	織	951D	
第24図3	胴	内外面に貝殻条痕文	暗褐 7.5YR3/3	条痕文系			○	織	288H	
第24図4	胴	外面に貝殻条痕文	赤褐 5YR4/8	条痕文系			○	織	2区	砂粒は粗め
第24図5	口縁	単沈線による菱形文か/瘤状貼付	にぶい黄褐 10YR5/4	二ツ木式			○	織	286H	
第24図6	胴	縄文LR(ループ文)	にぶい黄褐 10YR7/4	陶山式			○	織	953D	砂粒は少量
第24図7	胴	平行沈線による器面状文か/縄文LR(ループ文)	褐 10YR4/4	黒浜式			○	織	1区	織物多量
第24図8	胴	縄文R	にぶい黄褐 10YR5/3	黒浜式			○	織	7Y	
第24図9	胴	半截竹管による平行沈線文/縄文LR	暗黄褐 7.5YR2/3	諸磯a式 (新段階)			○	○	30P	
第24図10	胴	半截竹管による平行沈線文	にぶい黄褐 10YR4/3	諸磯a式 (中～新)	○		○		7Y	
第24図11	胴	斜位の刻目文/爪形文	黒褐 7.5YR3/2	諸磯b式 (古段階)	○	○	○		51P	砂粒は多量
第24図12	胴	浮線文	明黄褐 10YR6/6	諸磯b式 (中段階)	○		○		61P	砂粒は多量
第24図13	胴	地文を筋文後浮線文貼付。その後浮線文上に縄文飾文/縄文RL	暗褐 10YR3/4	諸磯b式か			○		7Y	
第24図14	胴	横位の集合沈線	にぶい褐 7.5YR5/4	諸磯b式 (最新段階)			○		38P	
第24図15	胴	平行沈線による矢羽根状の集合沈線	褐 10YR4/4	諸磯b式 (最新段階)			○		288H	砂粒は粗めで多量
第24図16	胴	ボタン状貼付文/集合沈線	暗褐 10YR3/3	諸磯c式			○	○	7Y	
第24図17	胴	ロッキングによる貝殻文/変形爪形文	明赤褐 5YR5/6	浮島1b式			○		286H	
第24図18	底	縄文LR(横位飾文)	にぶい黄褐 10YR5/4	前期木			○	○	7Y	
第24図19	胴	半截竹管による平行沈線/縄文RL	褐 7.5YR4/4	阿玉台IV式			○	金	1区	
第24図20	胴	消滅懸垂文/縄文LR	明褐 7.5YR5/6	加原利EⅢ式			○		287H	
第24図21	胴	J字文/縄文LR(死頭)	褐 7.5YR4/4	称名寺1式			○		12P	
第24図22	胴	櫛歯状工具による条線文	にぶい黄褐 10YR6/4	称名寺～ 堀之内式			○	○	286H	
第24図23	口縁	内面に2条の平行沈線/外面に沈線	褐 7.5YR4/6	堀之内2式			○		7Y	
第24図24	口縁	粗製深鉢/縄文LR	にぶい褐 7.5YR5/4	加原利B1式			○		7Y	
第24図25	胴	三文文か	にぶい赤褐 5YR5/4	安行3d式か			○	○	褐色粒	286H チャート細粒多量 褐粒子(大)多量

※石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織物 針：白色針状物

第15表 遺構外出土の縄文土器一覽

種別番号	器種	器高 口径 底径	特 徴	色調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第24図26	土師器 杯	(3.5) 一	いわゆる比企型杯/口縁部は短く 外反する/口縁部内面に沈線なし /口縁部と底部の境は丸みをもつ	胎土はに ぶい褐色 を基調	砂粒・小石・ 褐色粒を推 かき含む	内面：口縁部は横ナデ、底部は ヘラナデ/外面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラ削り	286 H	口縁部 破片

[単位：cm]

第16表 遺構外出土の古墳時代の土器一覽

第4章 調査のまとめ

城山遺跡第76地点は調査範囲が55.0㎡と狭小であったが、住居跡4軒・掘立柱建築遺構2棟・土坑6基・ピット62本と多くの遺構が検出された。また、検出された遺構と遺物の時期は、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世以降と広範に及ぶ。以下に、今回の調査により確認できた各時代について、調査所見をまとめることとする。

第1節 縄文時代

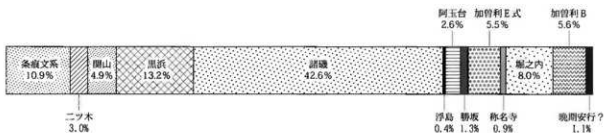
縄文時代の遺構は、土坑1基(956D)・炉穴3基(11～13FP)が検出されたが、遺構に伴って出土した遺物は皆無である。このため、遺構の時期を特定することは困難であったが、他の遺構との重複関係や覆土の観察結果から当該期に属するものとして推定した。しかし、287Hの床下で検出した3基の炉穴に関しては、286Hに伴う炉跡の可能性も考慮すべきかもしれない。

縄文土器は、早期～晩期にかけて169点・2,280.2gが出土した。ただし、出土した土器は小破片が主体なため型式分類が困難だったものも多く、58点を型式不明とした。型式分類が可能だったものの重量比等のデータは第17表に示した。主体となるのは前期諸磯式であり、重量比で4割を超える。次いで出土量が多かったのは、黒浜式・条痕文系である。以下、主な型式ごとに概観する。

早期条痕文系土器は、全体の約10%の出土量を占める。当該期の遺構として1区より炉穴を3基検出しているが、調査区別の出土量は1区7点・109.8g、2区4点・83.4gであり偏在性は認められない。このことから、出土したこれらの土器は炉穴に伴っていたものではなく、調査区付近に薄く分布すると推測される早期の遺物包含層が由来と考えられる。

関山式土器は、全体の約5%の出土量を占める。小破片が主体であり、調査区別の出土量は1区4点・54.5g、2区3点・31.6gを量り、出土傾向に大きな差は無かった。

型式名	条痕文系	二ツ木	関山	黒浜	諸磯	浮島	阿玉台	磐坂	加曾利E式	称名寺	堀之内	加曾利B	晩期安行?	不明	合計
数量	11	1	7	18	56	1	1	1	5	1	7	1	1	58	169
重量(g)	193.2	52.8	86.1	233.2	753.0	6.6	45.8	23.3	97.4	18.4	142.3	99.5	19.7	510.9	2280.2



第17表 縄文土器型式別出土量

黒浜式土器は、全体の約13%の出土量を占める。調査区別に見ると1区6点・56.5g、2区12点・176.7gであり、2区からの出土量が多い。周辺に当該期の遺構が存在した可能性がある。

諸磯式土器は全体の約40%の出土量を占め、特に諸磯a式新段階から諸磯b式新段階にかけてものが主体であった。調査区別の出土量は、1区16点・146.8g、2区41点・606.2gと2区が大半を占める。黒浜式期と同様に、周辺に当該期の遺構が存在したと推測される。

浮島式土器は1区から1点のみが出土した。全体に占める割合は0.4%と極めて低い。しかし、浮島式の主な分布域からはやや外れる志木市内で出土したことは注目される。

阿玉台式・勝坂式土器はそれぞれ1点ずつ出土しているが、全体に占める割合は低い。続く加曾利E式期もEⅠ～EⅡ式はほとんど認められないことから、少なくとも本調査地点周辺において、中期前葉から中葉にかけての時期は縄文人による土地利用が低調であったと考えられる。

加曾利E式土器は、全体の約6%を占める。加曾利EⅢ式が主体であり、全て1区から出土した。しかし全て小破片であるため、1区に当該期の遺構が存在したことを示すものとは考えにくい。

堀之内式土器は、全体の8%を占める。調査区別の出土量は、1区5点・127.1g、2区1点・15.2gであり1区が2区を凌駕する。ただし、櫛歯状工具により条線文が施される土器は称名寺式との区別が困難なことから、それらの土器が含まれている可能性も否定できない。

加曾利B式は、BⅠ式の粗製土器が2区の7Yから1点のみ出土した。比較的大形の破片であることから、7Yにより上坑などの小規模な遺構が壊された可能性がある。また、加曾利B式後半から晩期安行式にかけては遺物がほとんど認められないため、再び調査区周辺での土地利用が低調になったと推測される。

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、住居跡2軒(7Y・286H)・ピット3本が検出された。いずれの住居跡も調査区域外に延びるため遺構全体を把握することはできなかったが、城山遺跡では7Yのような弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡は検出数が少ないため、貴重な事例として注目されよう。

7Yは、表土層により遺構上部を削平されているため遺構確認面から床面までの深さが浅く、遺存状態はやや不良であった。覆土中からは縄文土器が多く出土したが、住居跡の形態や少量ではあるがハケ目調整された襖などが出土していることから弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡と考えた。しかし、住居跡に伴うと考えられる土器は小片が主体を占め、炉跡や柱穴等も検出されず、住居跡北西部が調査区域外であることなどから、その詳細は不明である。

286Hは、壁の一边が6mを超えると考えられる大型の住居跡である。この規模から考慮すると、主柱穴であるP2の北西にある5Pは主柱穴間に位置する補助的な小柱穴となる可能性があるかもしれない。また、入口施設の両側には南東壁に沿って床面より5～8cm程高い段が構築されていたが、その用途は不明である。主軸方位については、住居跡のほぼ半分が調査範囲外であることから第3章では記載をしなかったが、入口施設のある住居跡南東壁に対して直交する線を主軸とした場合、その方位はおおよそN-61°-Wと考えられる。出土遺物は287Hから混入したと考えられる土器が大半であり、住

居跡に伴うと考えられるものは乏しかった。土器以外には住居跡北東隅で床面上からイネ科やモミ属の炭化材が出土しており注目される。敷物もしくは壁の構築材であろうか。遺構の時期について、当初は遺構の規模や形態等から古墳時代後期の住居跡と考えていたが、比較的大形の破片が当該期のものに多いことや第9図1の高環形土器等が床面上より出土していることなどから、古墳時代前期の遺構と判断した。また、推定主軸方位も古墳時代後期の住居跡である287 Hや288 Hのそれとは大きな差があり、この点も後期の住居跡ではないことの傍証といえるかもしれない。

第3節 古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、住居跡2軒(287 H・288 H)・ピット8本が検出された。いずれの住居跡もその大半が調査区域外であり、287 Hは攪乱、288 Hは後世の土坑及びピットにより壊されていたため、遺構の詳細は明確ではない。また、287 Hと288 Hで土師器甕形土器の遺構間接合が確認されたが、他の出土遺物からは両者が同時期の遺構とは考えにくい。前述したように、288 Hは後世の土坑やピットによる破壊が著しいため、その過程で287 Hの遺物が混入した可能性がある。

287 Hは、その大部分を検出できた南東壁から推定すると一辺5 m弱の規模の住居跡と考えられる。主軸方位については、カマド及び住居跡の大半が調査範囲外であることから第3章では記載をしなかったが、入口施設のある住居跡南東壁に対して直交する線を主軸とした場合その方位はおおよそN-42°-Wと考えられ、288 Hと大きな差はなかった。また、入口施設及びそこから南側の間仕切り溝までの間に粘土及び粘土層が検出されたが、その由来は不明である。遺物は小破片が主体で覆土中から散在して出土したが、入口施設付近の床面近くから完形に近い土器がまとまって出土した。第13図2・3の上師器坏形土器は正位の状態で、第13図5・6の土師器甕形土器は横に潰れた状態で出土している。上師器坏形土器のうち1は比企型環の定型化タイプであるA5類、2は深身で口縁部が内傾・直立するタイプであるE類に分類され、共に茶褐色粒子や小石を含み明赤褐色を基調とした胎土であることから、いわゆる「入間系土師器」(尾形2008)と考えられる。

288 Hは、住居跡西隅からカマドまでの北西壁の長さがほぼ2.5 mであることから、カマドが北西壁の中央に設置されていたと仮定した場合、壁は一辺約5 mと推定され287 Hとはほぼ同様の規模と考えられる。遺物は覆土中から少量出土したが、後世の土坑やピットとの重複が著しいため住居跡に伴うものかどうか判断は難しい。住居跡に伴うことが確実なものとしては、カマド左脇の床面上から出土した土師器甕形土器の口縁部破片(第15図1)が挙げられる。複合口縁部の特徴から6世紀中葉に属するものと考えられ、この土器をもって住居跡の時期の根拠とした。

第4節 平安時代

住居跡や土坑は認められなかったが、2区で掘立柱建築遺構が1棟(7 T)検出された。2区では多数のピットが密集して検出されたため、発掘調査中に掘立柱建築遺構を確認することが困難であった。このため、整理作業時に柱痕が残るピットを抽出し、柱並びを検討して掘立柱建築遺構と推定した。ま

た、7 Tは南北棟として報告を行ったが、今回の調査区で検出できたのは遺構の一部であるため、東西棟となる可能性も否定はできない。

出土した遺物は57 Pから出土した須恵器環形土器(第16図1)が1点のみである。緻密な胎土で白色針状物質を含まない等の特徴から東金子窯のものと考えられる。小破片のため口径や底径は推測できなかったが、底部が回転糸切り後未調整のため、少なくとも9世紀代のものであろう。

第5節 中世以降

(1) 中世～近世について

中世以降の遺構は、掘立柱建築遺構1棟(8 T)・土坑6基(950 D～955 D)・ピット50本が検出された。また、近世に属する遺物は今回の調査では全く出土していない。

2区で検出された8 Tは、7 T同様に整理作業時に確認されたものである。16 Pと37 Pは覆土に褐色粒子を多量に含むことから同一の遺構に属する柱穴と考えた。また、35 Pは覆土に褐色粒子を含まないが、柱根跡を有し16 P・37 Pと柱筋が揃うことから8 Tに属するピットと推測した。8 Tを構成するピット(16 P・35 P・37 P)からは遺物が出土していないため時期の特定は困難であったが、中世の土坑と考えられる952 Dとの重複関係(952 D:古→37 P:新)から時期を推定した。

土坑はB群が5基、C群が1基検出された。いずれも出土遺物は乏しかったが、C群の953 Dからは土師質土器(第21図1)や輸入銭貨8点(第21図2～9)・炭化材など、比較的多くの遺物が出土した。覆土3層中に骨粉のような白色粒子が多く含まれること、銭貨が複数枚出土していることなどから、その性格は墓坑となる可能性がある。しかし、整理作業中の過誤により、3層中の白色粒子について自然科学分析による同定を実施できなかったため、墓坑として確定することができなかった。サンプル採取された覆土3層は、その土壌をJIS規格1mm目の篩により水洗し、微細遺物の抽出を行った。その結果、イネやダイズ属などの炭化種実が認められた(付編Ⅱ参照)。953 Dの性格を墓坑と考えた場合、付編の分析報告にもあるように、「葬送に伴って種実が燃やされた可能性」(付編53ページ)も考慮すべきであろう。また、出土した炭化材は燃料材と推定される(付編Ⅲ参照)が、同じく燃料材と考えられる炭化材が出土した955 Dとは構成樹種が異なるため、「両土坑の機能が異なっていた」(付編56ページ)可能性が示された点も注目される。

ピットは2区を中心に多数検出されたが、そのほとんどで遺物は出土しなかった。このため遺構の時期比定は困難であったが、重複関係から古墳時代の住居跡よりは新しいこと、調査地点が柏城本丸内と考えられることなどから、その多くを中世以降と判断した。また、調査範囲が狭いため明確にすることはできなかったが、これらのピット群は8 Tと同様に中世の掘立柱建築遺構を構成する柱穴となる可能性がある。

ピットからの出土遺物は前述したように乏しかったが、1区の1 Pからは上田分類(上田1982)のA類(13世紀後葉～14世紀前葉)に比定される龍泉窯系の鎗蓮弁文を持つ青磁小碗(第22図1)が出土している。本調査地点では他に年代を明確にできる遺物は認められなかったが、第72地点87 Pでは14世紀代の龍泉窯青磁が出土し、第58・60地点40号溝からは同安窯系の青磁碗が出土している。また、第63地点781 Dでは13世紀前葉と考えられる4型式の常滑窯の甕も出土している。これ

らの遺物は柏城の形成を考える上で注意が必要であろう。柏城三の丸にあたる第42地点等では15世紀後半～16世紀の遺物が主体を占めていることから、柏城はほぼこの時期に形成されたと考えられているが、その築城年代が「14世紀以前にさかのぼる可能性」(尾形ほか2005)も指摘されているように、その前身として鎌倉時代の在地領主層による居館等が存在したのかもしれない。

(2) 近代～現代について

近代～現代の遺物としては、1区表土中より出土した第24図28の瓦が挙げられる。刻印に「深谷」とあることから、瓦の生産地として著名な深谷市近郊の瓦窯で生産されたものと考えられる。

[引用・参考文献]

- 赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をめぐって』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 新井和之 1994 「黒沢式土器」『縄文文化の研究3 縄文土器』雄山閣出版
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 尾形則敏 2006 「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例—」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
- 2008 「古墳時代後期の土師器研究の再認識—(仮称)「人間系土師器」の実態と生産地推定を例として—」『埼玉考古』43 埼玉考古学会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2005 「城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・藤波啓容・鈴木 徹他 2008 「城山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市遺跡調査会調査報告第17集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・徳留彰紀・坂上直嗣他 2011 「城山遺跡第63地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財 第46集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子他 2012 「城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財 第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀・村上亨司他 2012 「城山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財 第49集 埼玉県志木市教育委員会
- 古代の人間を考える会 2012 「古代人間の土器と遺跡(1)—須恵器環の編年と遺跡動態を考える—」古代の人間を考える会
- 田中和之 1996 「蓮田市天神前遺跡出土の浮島・興津系土器の位置付け」『埼玉地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也ら追悼論文集刊行委員会
- 細田 勝 1993 「関東地方南半における前期終末の様相」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 2002 「諸磯式土器の変遷過程」『研究紀要』第17号(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 松田光太郎 2005 「浮島式土器の研究」『古代深谷』IV 早稲田大学出版部

[付 編]

自然化学分析

I. 城山遺跡第76地点出土の貝類遺体群

阿部常樹（國學院大學研究開発推進機構）

1. はじめに

本調査地点の2区30Pより貝類遺体群が出土した。本節では本資料群について報告を行う。

2. 分析方法

2-1. 計数方法

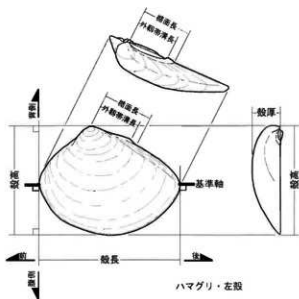
二枚貝類は、殻頂部分の残存しているものを計数対象とする。それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数し、そのうち多いほうを最小個体数とする。

2-2. 二枚貝類の計測方法

二枚貝類は以下の方法で計測を行う。本報告では、殻長と外靱帯溝長を計測対象とする。殻の前後（横軸）で最も長い箇所を基準軸とした上で、計測部位を以下のように定義する。

殻長：殻の前後（横軸）で最も長いところの幅（基準軸上の殻の幅）。つまり、“最大長”である。

外靱帯溝長：外靱帯溝は、後背縁において殻頂部からその中ほどにかけての靱帯の付着している溝を指す。外靱帯溝長はその部分の長さとする。



第25図 二枚貝類計測凡例

3. 分析の結果

同定の結果、ハマグリ (*Meretrix lusoria*) が最小で4個体 (MNI: 左殻4個体、右殻1個体) が含まれていた。本種以外の分類群は含まれていなかった。

本資料群は破損が激しく殻長の計測は不可能であるが、外靱帯溝長の計測が可能なのが1点認められた。(図版9-2) 計測の結果15.1mmであり、報告者がかつて江戸遺跡などで用いた推定式で外靱帯溝長から殻長を推定した結果、50mm～55mmであった。なお、他の資料もほぼ同じサイズであった。

本貝類遺体群の貝種が限られることやハマグリ サイズが殻長50mm以上の大型であるなどの傾向は、報告者の管見の限りでは、関東地方の古代集落跡や中世城跡などで一般的なものである。

〔引用文献〕

阿部常樹 2006『貝類遺体のサイズに関する計測方法』『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点発掘調査 報告書』東京大学埋蔵文化財調査室

Ⅱ. 城山遺跡第76地点から出土した炭化種実

佐々木由香・バンドリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

志木市柏町に位置する城山遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地する、古墳時代前期や平安時代を主体とした集落跡である。ここでは、第76地点の古墳時代前期と中世の遺構から回収された炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料と同じ遺構から出土した炭化材の樹種同定も行われている（炭化材樹種同定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、第76地点の1区286号住居跡の北東隅付近の床面直上と2区953号土坑の3層、2区37号ピットの1層という、3基の遺構覆土から回収された炭化種実である。遺構の時期は、286号住居跡が古墳時代前期、953号土坑と37号ピットが中世である。

土壌の水洗は、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合によって行われた。水洗は、最小1.0mm目の篩を用いて行った。抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、志木市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、草本植物のハギ属炭化種子とダイズ属炭化種子、イネ炭化種子の3分類群が見いだされた（第18表）。また、科以下の同定ができなかった不明炭化種実をAとBにタイプ分けした。この他に、科以下の同定に必要な識別点を欠く同定不能炭化種実が見いだされた。

以下に、産出した炭化種実について遺構別に記載する（不明と同定不能炭化種実は除く）。

1区286号住居跡：同定可能な種実は得られなかった。

2区953号土坑：ハギ属炭化種子とダイズ属炭化種子、イネ炭化種子がわずかに得られた。

2区37号ピット：同定可能な種実は得られなかった。

(1) ハギ属 *Lespedeza* sp. 炭化種子 マメ科

上面観・側面観ともに楕円形。上端寄りに円形の小さい臍がある。表面は平滑。長さ1.6mm、幅1.0mm。

(2) ダイズ属 *Glycine* sp. 炭化種子 マメ科

破片で変形が著しいが、本来の上面観は楕円形、側面観は長楕円形か。へそは側面のほぼ中央にあり、長楕円形で全長の1/3未満。小畑ほか（2007）に示されたダイズ属の特徴である、へその中央の縦溝

分類群	地区 1区		2区	
	遺構番号 286H		953D	37P
	層位	床直	3層	
	部位	炭	焼土	-
ハギ属	炭化種子			1
ダイズ属	炭化種子	(1)		
イネ	炭化種子	1	(1)	1
不明A	炭化種実			2
不明B	炭化種実			1
同定不能	炭化種実			(2)

() は破片を示す。

第18表 城山遺跡第76地点から出土した炭化種実

とその周囲の隆線がある。残存長 5.2mm、残存幅 3.4mm、厚さ 3.5mm。小畑（2008）に示された現生種と大きさを比較すると、出土した炭化種子の元の大きさは栽培種の範疇である。

(3) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子 イネ科

上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 3.6mm、幅 2.2mm。

(4) 不明 A Unknown A 炭化種実

上面観は円形、側面観は楕円形。縦方向に溝がある。長さ 2.1mm、幅 1.3mm。

(5) 不明 B Unknown B 炭化種実

上面観・側面観ともに方形に近い楕円形。上端寄りに円形の小さい臍がある。表面は粗い。長さ 1.9mm、幅 1.4mm。

4. 考察

第 76 地点の遺構から得られた炭化種実を検討したところ、古墳時代前期の 1 区 286 号住居跡と中世の 2 区 37 号ピットからは同定可能な種実は得られなかった。

中世の 2 区 953 号土坑の 3 層からは栽培植物のイネと、大きさから栽培種のダイズと考えられるダイズ属、野生種のハギ属がわずかに得られた。この土坑からは輸入銭貨が伴って出土しており、墓の可能性が考えられている。また、3 層には焼土が含まれており、炭化材が伴っていた。焼土混入の背景については検討を要するが、遺構が墓であるならば葬送に伴って種実が燃やされた可能性も考えられる。

城山遺跡では、これまでに複数地点で炭化種実の同定が行われている。例えば、第 42 地点の古墳時代後期の住居跡ではイネとマメ科が得られている（藤根ほか 2005）。また、第 59 地点の 167 号住居跡（7 世紀中葉）の覆土からはコムギとイネのほか、アワやブドウ属、ニワトコなど、同地点の 170 号住居跡（9 世紀後半）からはモモ、第 62 ①地点の 238 号住居跡（6 世紀後葉）からはモモとスモモ、第 62 ②地点の 236 号住居跡（7 世紀中葉）からはモモが得られている（佐々木・バンダリ 2011）。さらに、第 62 ③地点の 275 号住居跡（7 世紀）から出土した土器内からはコムギ、第 62 地点の古墳時代中・後期の竪穴住居跡からは、モモとスモモ、イネ、アワとコムギ、オオムギ、シソ属などが得られている（佐々木・バンダリ 2012）。

これまでの検討例をみると、今回種実が得られた遺構の時期は中世で新しいが、ダイズ属は初めて見いだされた。今回の同定の結果により、新たに中世の利用種実が判明した。

【引用文献】

- 藤根 久・鈴木 茂・新山雅弘・植田弥生 2005 「土坑内土壌の微細物分析・炭化物同定」『城山遺跡第 42 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』223-230p 志木市遺跡調査会調査報告第 10 集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 佐々木由香・バンダリ スタルジャン 2011 「城山遺跡から出土した炭化種実」『志木市遺跡群 19』65-68p 志木市の文化財第 45 集 埼玉県志木市教育委員会
- 佐々木由香・バンダリ スタルジャン 2012 「城山遺跡第 62 地点から出土した炭化種実」『城山遺跡第 62 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』181-185p 志木市の文化財第 48 集 埼玉県志木市教育委員会

Ⅲ. 城山遺跡第 76 地点出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

武蔵野台地北東端部の柳瀬川右岸の台地上に立地する城山遺跡は、縄文時代から中・近世までの複合遺跡である。第 76 地点では竪穴住居跡や土坑などが検出され、遺構から出土した炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、古墳時代前期の竪穴住居跡である 1 区 286 号住居跡から 1 袋、中世の土坑である 2 区 953 号土坑から 3 試料と 955 号土坑から 8 試料の 12 試料である。286 号住居跡の試料は 1 袋内に多数の炭化材が確認できたため実体顕微鏡で観察した所、2 種類の樹種が確認できた。したがって、286 号住居跡の試料については、各樹種で最も大きな炭化材 1 点について同定を行った。同定した試料は合計で 13 点である。各樹種について、同定前に残存半径と残存年輪数の計測を行った。残存半径は試料内で残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を数えた。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(径目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形してカーボンテープで試料台に固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属 1 分類群、広葉樹ではクリとコナラ属クヌギ節(以下クヌギ節と呼ぶ)、サクラ属、シラキの 4 分類群、単子葉ではイネ科 1 分類群の、計 6 分類群が産出した。クヌギ節が 6 点で最も多く、サクラ属とイネ科が各 2 点、モミ属とクリ、シラキが各 1 点であった。年輪数の計測結果は、残存半径 2.7cm 内に 6 年輪がみられた試料 No.13 のクヌギ節のようにやや年輪幅の広い試料もみられたが、多くは残存半径 1.5cm 内に 9 年輪がみられた試料 No.10 のクヌギ節のような比較的年輪幅の詰まった試料が多かった。同定結果を第 19 表に、一覧を第 20 表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版 10 1a-1c (No.2)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかだが、

樹種	出土遺構	時期		合計
		古墳時代前期	中世	
		286H	953D 955D	
モミ属		1		1
クリ			1	1
コナラ属クヌギ節			6	6
サクラ属			1 1	2
シラキ			1	1
イネ科		1	1	2
合計		2	3 8	13

第 19 表 城山遺跡第76地点出土炭化材の樹種同定結果

試料では2年輪をまたぐ材が得られなかった。放射組織は単列で、高さ2～10列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版10 2a-2c (No.4)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は単列で、同性である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(3) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版10 3a-3c (No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(4) サクラ属(広義) *Prunus* s.l.バラ科 図版10 4a-4c (No.7)

小型の道管が、単独ないし2～4個斜め方向に複合し、密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が確認できる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～4列となる。広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とした。

(5) シラキ *Neoshirakia japonica* (Siebold et Zucc.) Esser トウダイグサ科 図版10 5a-5c (No.5)

中型の道管が単独ないし2～3個放射方向に複合し、やや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、立方、直立細胞が混在する異性で、単列となる。

シラキは岩手県、山形県以南の本州、四国、九州などの温帯下部から暖帯の、日当たりのよい山腹などに多く分布する落葉小高木の広葉樹である。材はやや重硬であるが、切削加工等は困難でない。

(6) イネ科 Gramineae 図版10 6a (No.1)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の種である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など、7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく同定に至っていない。

4. 考察

古墳時代前期の竪穴住居跡である1区286号住居跡の炭化材は、住居跡の北東隅付近の床面直上で、951号土坑に切られる形で検出された。産出した樹種はモミ属とイネ科で、試料の袋内ではイネ科が多くみられた。用途については建築材であると考えられている。モミ属は木理通直で素直な材であり、加工性も良くて建築材に向いた樹種である(伊東ほか 2011)。イネ科は中空で直径4mmであった。イ

ネ科は、建築材であったとすると竪穴住居跡の屋根材や住居内の敷物や壁材などの可能性が考えられる。

城山遺跡では、これまでも第59地点と第62⑩地点で5世紀末～9世紀後葉の住居跡6軒から出土した炭化材の樹種同定が行われている。その結果、いずれの住居跡でもクヌギ節とコナラ節が多く産出し、その他にはオニグルミとクヌギ節がわずかにみられた（小林 2011）。今回の286号住居跡の樹種同定でクヌギ節がみられなかったのは、同じ時期の住居跡建築材でも、異なる部位に用いられた建築材であったためかもしれない。

中世の土坑である2区953号土坑の炭化材は、輸入銭貨と併せて検出されており、墓であった可能性が考えられている。材の用途としては、遺体を茶毘に付した際の燃料材の残渣の可能性が考えられる。産出した樹種はクリとサクラ属、シラキが各1点で、いずれも薪炭材として普通に用いられる樹種である（平井 1996）。

同じく中世の土坑である2区955号土坑では、クヌギ節が6点、サクラ属とイネ科が各1点産出した。イネ科は中空であったが、微破片で直径の確認は行えなかった。土坑内では部分的に被熱を受けた箇所が確認できるため、遺構内で木材を燃焼した可能性があり、試料は燃料材であった可能性がある。産出したクヌギ節とサクラ属は薪炭材として一般的で、特にクヌギ節は長時間燃焼し続けるという材質を持っている。イネ科は着火材として利用された可能性がある。

953号土坑と955号土坑の炭化材は、共に燃料材と考えられたが、構成樹種は異なっていた。これは、両土坑の機能が異なっていたためかもしれない、注意が必要である。

【引用文献】

平井信：1996 『木の百科—解説編—』642p 朝倉書房

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』238p 青海社

小林克也 2011 『城山遺跡から出土した炭化材の樹種同定』『志木市道跡群19』71-74p 志木市の文化財第45集 埼玉県志木市教育委員会

試料No.	出土遺構	サンプル名	種類	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	備考	時期
1	286H	炭	建築材	イネ科	-	-	1試料内から産出 同一樹種が多数確認される	古墳時代 前期
2				モミ属	0.3	1		
3	953D	炭1	燃料材	サクラ属	1.1	8		中世
4		炭2		クリ	1.2	4		
5		炭3		シラキ	1.1	8		
6	955D	炭1	燃料材	コナラ属クヌギ節	1.1	9		
7		炭2		サクラ属	1.0	9		
8		炭3		コナラ属クヌギ節	0.7	6		
9		炭4		コナラ属クヌギ節	1.3	4		
10		炭5		コナラ属クヌギ節	1.5	9		
11		炭6		コナラ属クヌギ節	0.7	3		
12		炭7		コナラ属クヌギ節	2.7	6		
13		炭8		イネ科	-	-		

第20表 城山遺跡第76地点出土炭化材の樹種同定結果一覧

版 图



1. 表土剥ぎ風景 (1区)



2. 表土剥ぎ風景 (2区)



3. 作業風景 (1区)



4. 作業風景 (2区)



5. 第三小学校生徒現場見学風景



6. 956号土坑



7. 11～13号炉穴



8. 11号炉穴



1. 12号炉穴



2. 13号炉穴



3. 7号住居跡



4. 286号住居跡



5. 286号住居跡炭化材・焼土出土状態



6. 69号ピット遺物出土状態



7. 69号ピット



8. 287号住居跡遺物出土状態



1. 287号住居跡遺物出土状態



2. 287号住居跡遺物出土状態



3. 287号住居跡紡錘車出土状態



4. 287号住居跡凸堤



5. 287号住居跡



6. 288号住居跡



7. 288号住居跡カマド



8. 7号掘立柱建築遺構



1. 7号掘立柱建筑遗構 (14 P) 土层断面



2. 8号掘立柱建筑遺構



3. 8号掘立柱建筑遺構 (16 P) 土层断面



4. 8号掘立柱建筑遺構 (16 P)



5. 8号掘立柱建筑遺構 (37 P) 土层断面



6. 950号土坑



7. 951号土坑



8. 952号土坑



1. 953号土坑土層断面



2. 953号土坑



3. 954号土坑



4. 955号土坑炭化材・焼土検出状態



5. 955号土坑



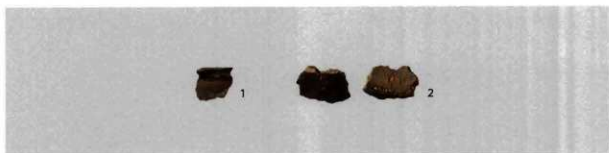
6. 30号ピット貝出土状態



7. 調査区全景 (1区)



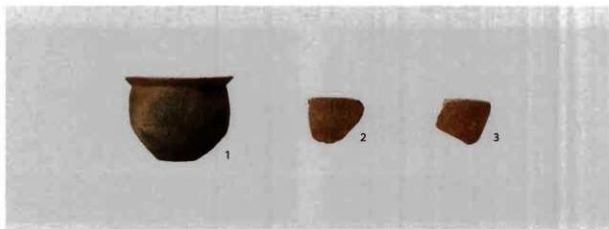
8. 調査区全景 (2区)



1. 7号住居跡出土遺物



2. 286号住居跡出土遺物



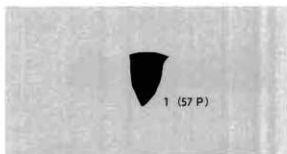
3. 69号ピット出土遺物



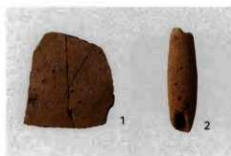
1. 287号住居跡出土遺物



2. 288号住居跡出土遺物



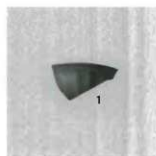
3. 7号掘立柱建築遺構出土遺物



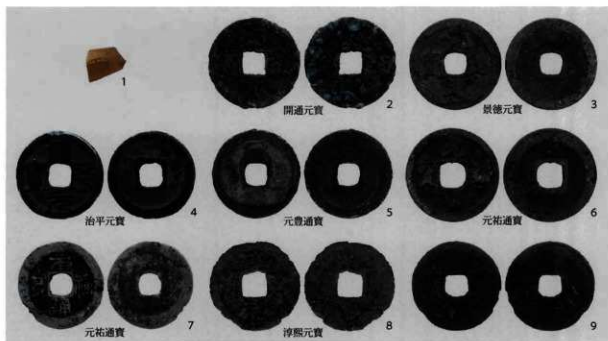
4. 950号土坑出土遺物



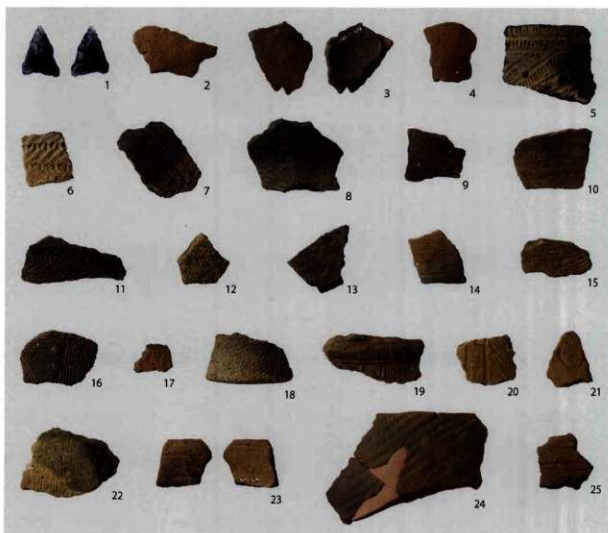
5. 951号土坑出土遺物



6. 1号ピット出土遺物



1. 953号土坑出土遺物



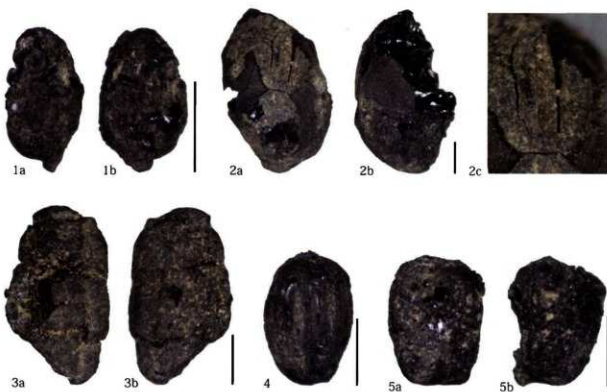
2. 遺構外出土遺物 (縄文時代)



1. 遺構外出土遺物（古墳時代以降）



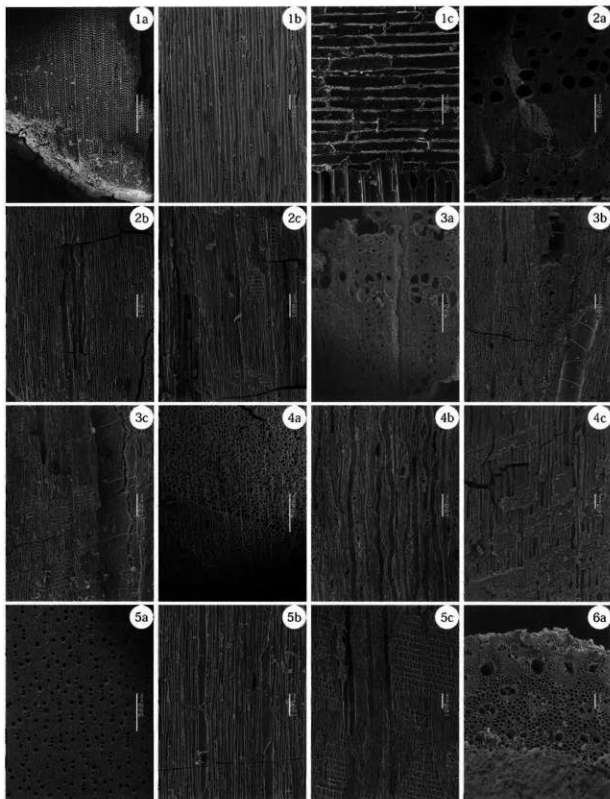
2. 出土した貝類（30 P）



スケール 1,2a-b,3-5:1mm,2c は任意

1. ハギ属種子（2区 953D）、2. ダイズ属炭化種子（2区 953D）、3. イネ炭化種子（2区 953D）、
4. 不明 A 炭化種実（2区 953D）、5. 不明 B 炭化種実（2区 953D）

3. 城山遺跡第 76 地点から出土した炭化種実



1a-1c.モミ属 (No.2)、2a-2c.クリ (No.4)、3a-3c.コナラ属クヌギ節 (No.10)、4a-4c.サクラ属 (No.7)、
5a-5c.シラキ (No.5)、6a.イネ科 (No.1)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

報告書抄録

ふりがな	しろやまいせきだい76ちてん まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	城山遺跡第76地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第52集							
著者氏名	尾形剛敏 大久保聡 白崎智隆							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	平成25 (2013) 年3月31日							
よりから	よりから	コード	北緯	東経	調査期間	発掘調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")			
城山遺跡 (第76地点)	志木市柏町 3丁目2609-1・ 2610の一部	11228	09 - 003	35° 49' 58"	139° 34' 11"	20120426 ～ 20120524	55.0㎡	災害用 トイレ 設置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
城山遺跡 (第76地点)	集落・城館跡	縄文時代	土坑	1基	土器・石器			
		弥生時代後期 ～古墳時代前期	炉穴	3基				
			住居跡	2軒	土器・土製品			
			ピット	3本				
		古墳時代後期	住居跡	2軒	土師器・須恵器・土製品			
ピット	8本							
奈良・平安時代	掘立柱建築遺構	1棟	須恵器					
	ピット	1本						
	中世以降	掘立柱建築遺構	1棟	妬器・青磁・土師質土器				
土坑		6基	土製品・銭貨					
ピット		50本						
<p>要 約</p> <p>城山遺跡は、旧石器時代～近世・近代にかけての複合遺跡である。今回発掘調査を実施した第76地点では、調査面積は狭小であったが、縄文時代から近世・近代の遺構・遺物が検出された。</p> <p>縄文時代の遺構では、土坑・早期の所産と思われる炉穴が検出された。遺物については、遺構外より早期から晩期にかけての土器片が出土した。</p> <p>弥生時代後期から古墳時代前期の遺構では、住居跡・ピットが検出されている。本遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡の検出数は少ないため、7Yは貴重な事例として挙げられる。</p> <p>古墳時代後期では住居跡・ピットが検出されており、住居跡の時期は、出土土器の特徴から6世紀中葉～7世紀中葉に位置付けられる。特に7世紀中葉に比定される287Hでは、完形に近い状態まで復元できる環・壘形土器が、入口施設付近より出土している。</p> <p>奈良・平安時代では、掘立柱建築遺構・土坑・ピットが検出された。掘立柱建築遺構は、南北棟の2間分を確認しており、調査区外に展開する。</p> <p>中世以降では、掘立柱建築遺構・土坑、ピットが検出されている。特に953Dは、銭貨が8点出土していることから、墓坑の可能性が高い。</p>								

志木市の文化財 第52集

城山遺跡第76地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成25(2013)年3月31日

印刷 能登印刷株式会社